宮崎県歴史の道調査報告書

薩摩街道

1979

宮崎県教育委員会

薩摩街道

ページ	行	誤	正
4	㊨31	辺路番所	遍路番所
9	㊨1	陳地	陣地
11	㊧6	穏番所	隠番所
11	㊨18	神桂神社	神柱神社
14	㊨2	本庄川	本庄側
15	㊧31	武抜	武技
16	㊧31	格別扱い	別格扱い
16	㊨6	幹囲4約	幹囲約
16	㊨23	㉓岩屋野の辺路番所	㉓岩屋野の遍路番所
31	㊧8	阿弥阿如来像	阿弥陀如来像
31	㊨13	⑯神桂神社	⑯神柱神社
(まとめ)	4.調査員	井上政造	井上改造

目　　次

1. 薩摩街道の特色 …… 1
2. 薩摩街道の歴史 …… 1
3. 薩摩街道 …… 3
4. 街道沿いの文化財 …… 13
5. 写　　真 …… 1

序

宮崎県は、東は日向灘・北・西・南は山岳で県を境する地勢のため、かっては交通不便の地とされていましたが、戦後の急速な発展にともない、本県もあらゆる面で近代化の波を受けてきました。

そのため古来から人や文物の交流の舞台となった道も年々姿を変え、沿道の交通関係遺跡は姿を消そうとしております。今のうちに街道調査を行い、街道の歴史的背景、果たした役割、現状等を明らかにしようと「歴史の道調査」を、昭和５２年度に県北５街道、昭和５３年度に県南４街道の調査を実施し、引き続き本年も薩摩・肥後街道と諸塚間道の調査を実施いたしました。

本報告書は、街道の特色・歴史・様子・及び街道沿いの文化財や遺跡の解説、及び街道地図からなっています。

短期間になされた調査ですので、不備な点もあろうかと思いますが、本県の旧街道保存、あるいは交通史の研究のための基礎資料として御活用いただければと思っております。

最後に、お忙がしいなか、お骨折りいただいた調査員の方々、並びに調査員に御協力くださいました地元の方々に厚くお礼申しあげます。

昭和55年３月

宮崎県教育委員会

教育長　四本　茂

例　　言

1. 街　路　名

江戸時代にあっては、道路の規模により街道と往還を使い分けていたようであるが、現在往還は用いないのですべて街道とした。

また、街道は、厳密にいえばいくつかの往還に細区分される。

しかし、すべてをあげる必要もないので、距離も長く中心となるものを代表させた。

2. 街路の概要説明

街道の詳細な記述は、街道沿いの交通関係遺跡の解説に譲り、ここでは街道の持つ歴史的背景、街道の果たした役割、街道の現状等を概括的に記した。

3. 街道沿いの交通関係遺跡解説

(1) 個々の解説の前半に、遺跡及び遺跡周辺の状況、遺跡と遺跡間の状況の過去から現在にわたって述べ、後半に遺跡そのものの解説を付した。

従って個々の解説をとおして読めば、起点から終点迄街路の全容が把握できる。

(2) 街道沿いの主な集落には、戸数、集落間の距離又は起点からの距離を記したが日向地誌によった。地誌は明治8年の調査をもとにしている。

(3) 集落間の距離、起点からの距離で、何里何町と記してあるのは日向地誌によるもので、他は地図から割出した距離であるので正確は期しがたい。一応の目安としていただきたい。

(4) 交通関係遺跡の配列はほぼ道順に沿っているが、間道あり脇道ありで複雑をきわめるので、街道図を参照していただきたい。

1　薩摩街道の特色

今回薩摩街道として調査したのは、佐土原・本庄・高岡・高城を経て、都城・更に鹿児島県境に至る街道（薩摩街道）と、宮崎から田野を経て都城へ至る街道（鹿児島街道）である。

なお、薩摩街道は、本庄六日町から都城を通り県境までの約５２Km、鹿児島街道は、清武町加納から青井岳天神嶺を越え、高城町桜木、更に勝岡を通り郡元から都城に至る約５３.１Km、これに田野（鹿児島街道）から高岡（薩摩街道）に至る間道約２６Kmを調査対象とした。

それぞれの街道の特色を述べると、薩摩街道は、藩内の要衝を結ぶ道が領域拡張に伴って順次伸長してきた街道と考えられる。軍事上の目的は勿論であるが、藩主の参勤交代や幕府巡検使等の往来道、経済社会の発達に伴う人と物資の輸送道、地方との連絡道として重要な使命を果してきた。

商業の中心地本庄より赤谷までは一部峠はあっても宮崎平野の西部を行く緩かな道である。赤谷から一里山・国見山を越す道は青井岳山系に連なる険しい山道で最大の難所である。有水・石山間は丘陵を上り下りする起伏の多い山道で、高城から島津氏の根拠地であった都城・更に県境までは霧島盆地をよぎる平坦な道である。

昔の面影を残しているのは、高岡町内山神社あたりから高岡町役場付近までの士族屋敷、一里山の尾根道の一部、去川の関守を務めた二見家屋敷、高城町内の諏訪馬場通り、和田口付近の武家屋敷、桜木の集落内の道、そして都城市の蔵馬場通り、元服坂である。

一方、鹿児島街道は、清武町から田野町まではなだらかな丘陵を行く道が続き、田野町の七野を過ぎると非常に険しい青井岳天神嶺が山之口との間に南北に横たわっており、藩政期に於ける伊東と島津の領界をなしている。

険しい天神嶺を越し、都城盆地に出るには幾つかのルートがあるが、青井岳の山麓山之口麓で一筋となって交通の要所桜木に至り、更に進むと、高岡・去川経由の薩摩街道に連絡する。

麓からの街道は視野をさえぎるものなく、はるか霧島連山を望みながら歩を進める平坦道が延々と続く。又、旧道と平行し、蓼池の「かくれ念仏洞」脇を通る国道２６９号線は、明治３４年に開通したもので、脇岡を通り都城に至っている。

旧街道の面影を色こく残しているのは、清武町の清武城跡下を通る坂道、山之口町麓の石垣や武家門を多く残す亀甲地区、城下集落の勝岡内の水路やかくれ念仏洞などである。

山野を行く旧道は、一部林道に使用されている外はほとんど自然の状態に還っているようである。

高岡から薩摩街道と、清武からの鹿児島街道を結ぶ田野・高岡間の間道は、谷越え山越えが連続の道で道沿いに小集落が点在するに過ぎない。この尾根伝いの旧間道は、現在の県道に沿いながら大淀川中流高岡町の大の丸橋に達しているが、所々を県道に寸断されたり、消滅しているほかはその跡をよくとどめている。

2　薩摩街道の歴史

イ、薩摩街道

去川の関を経由し佐土原へ至る薩摩街道を押えた島津氏は、天正５年（１５７７）

伊東氏の豊後落ち以後、天正１５年(1587)豊臣秀吉の島津征伐までの１０年間は、日向・大隅・薩摩の３国を統治した。

この街道は、戦乱の時期は兵馬を進める道であった。しかし、戦乱おさまった平和な時期には、小規模ながら街道の補修や新たな道路作りも行われたであろう。高城から去川に至る嶮路を開いたのは島津氏でなく、伊東氏と考えられる。理由は、天正年間、伊東氏を駆逐した島津氏がいち早く去川に関所を設けているからである。

慶長５年（１６００）関ヶ原の戦に敗れた島津義弘が帰国の途中高岡にとどまって急拠城を築き、武士団７００余戸を移して北の備えとしてから、いよいよこの街道は鹿児島と結ぶ重要な基幹道となった。

江戸時代に入ると藩主の参勤交代や上使の往来の度に街道は整備され、物資や人の往来が増加して来た。現在旧道の大半は拡張されて国道となっているが、地方道・農道・林道として残っているもの、山中に埋れ廃道になっているものもある。

薩摩街道は陸路だけでなく、大淀川水系を利用した水路もあったが、主に上方へ向けての物資輸送に使用した。これら山産物の検査・取締は去川・高岡・倉岡川口に置かれた川番所で行われた。

ロ、鹿児島街道

正平７年（１３５２）島津氏の日向経略を端緒に、九州探題今川了俊の子今川満範が、都城攻撃のため伊東勢を動かして日薩隅三州の反勢力を結集したのは天授２年12月（１３７６）のことである。それ以来、島津・伊東の対立が先鋭化して都城盆地の争奪戦が１８０年に及んで繰り返された。

伊東の都城攻略に当って、まず天然の防壁となっている青井岳天嶺を押さえねばならなかった。

清武・田野を経て青井岳を越し、都城に攻め込む道は、古代に整備された官道として想定されている。駅制が設けられて租調などの貢租を運搬する道であった。

平安時代諸制度の基本資料「延喜式」の中の日向路１６駅に出てくる。救麻（熊野）～救弐（田野）～水俣（山之口）～島津（郡元）の行路がそれである。
又、治承元年（１１７７）平氏討伐が露見し、鬼界島に配流された僧俊寛が辿ったのもこの道であろうといわれている。

天正１５年（１５８７）豊臣秀吉の島津制圧後、島津家久（佐土原）、伊東祐兵（飫肥）、秋月種長（高鍋）、高橋元種（延岡）の分封が定まると、それまでの抗争は一応収まり、軍事道路としての性格は薄れ、人や物資の交流道となった。しかし、領民や特産物の自藩からの流出、逆に他藩からの流入を防ぐため、各所に関所や番所が設けられ取締りは厳重をきわめた。

この街道の記録は、天正年間中宮崎城主だった上井覚兼の日記にくわしい。覚兼は島津の武将で、伊東氏没落後宮崎城を預かったが、宮崎・鹿児島間往復のことを日記にとどめている。

ハ、田野・高岡を結ぶ間道

田野より高岡に至る道は、薩摩街道と鹿児島街道を南北に結ぶ谷越え山越えの間道である。

藩政時代幕府と対立関係にあった薩摩藩の街道取締りは厳重を極めて、特に薩摩街道の去川関での改めは厳しかった。そのため、この間道を利用して田野に出、青井岳の峻嶮を越え都城に入る者も多かったよう

である。

又、薩摩藩が藩外持出しを禁じている黒砂糖の抜荷もこの間道でなされ、他藩へ流出したようである。

3 薩摩街道

(1) 本庄から去川へ

佐土原の城下を起点とする薩摩街道は、かつて豪商桝屋・和泉屋等の連なる本庄六日町通りで南へ折れる。本庄川の渡し場へ出る道筋は三筋あって何れとも決め難いが、仲町交差点より東へ約９００ｍの所から南へ折れる①道がより多く利用されたと思われる。この道をしばらく進むと嵐田の渡し場②跡の河岸に達する。日向地誌に「本庄より高岡へ一里二丁三十間」（約9.6Km）とある。

渡し場の対岸の旧嵐田村榎瀬（高鍋領）には、藩の年貢米倉庫③跡があって今も倉庫番の子孫の方が住んでおられる。倉庫前の道を山手へ登り、嵐田の東端山際の水田へ④下る集落の北端に宝暦三年銘の六地蔵幢がある。街道は、集落に入らず嵐田神社西側を抜けて境野峠へと通ずる。

嵐田神社⑤の秋祭りには、村の歌舞伎芝居がかかり、演芸類一切御法度の島津領内からは芝居見物に多勢の士族が押しかけて盛大に祝儀を振舞ったので、村中で料理を作り旦那様扱いの持てなしをして大層な賑いだったと語り継がれている。

日向地誌に「嵐田渡し綾川にあり、巾四十二間、平水三尺五寸、渡舟一艘」とある。

県道に架かる本庄橋北岸のあたりは勘場⑥跡である。

県道を越えて境野峠⑦へは荒れたみかん畑の中を登って行く。峠のところで県道を直角に横切って高岡町（島津領）に入る杉林を抜けて田圃へ下ると高岡町飯田である。田圃の中に処刑場⑧があり、街道はすぐ東側を通る。この付近は松並木があり、見張番所や年貢米倉庫もあったらしい。このあたりは田圃で道がはっきりしない。丸山団地から道は西へ曲って高岡城⑨（天ヶ城）に向って城下に入って行く。

高岡は旧名を久津良と言った。穆佐（むかさ）から綾への道が通っている。

内山神社前から真直に延びる道筋は商人町であったが、大淀川を利用して舟による物資輸送が始まると川沿にへ移動して行った。国道１０号線の道沿いに豪商角太屋⑩（清水家）、油屋（水間家）等の商家が軒を連ねている。これらの商家は、裏の川沿いにそれぞれの舟着場を持ち大きな倉庫が幾棟もあって、今でも昔の繁栄を偲ぶことができる。

飯田から城下へ入った街道は内山神社脇の大手門⑪から御仮屋馬場通りに出る。ここには、藩主の信仰があつかった日蓮宗本永寺が今もあり、武家屋敷⑫が多く、古い武家門⑬・石垣屏・母屋・倉庫等、古風なたたずまいが感じられる。地頭館・御仮屋や練士館・練兵場の跡は現在小学校や役場になっている。

御仮屋馬場に併行して中村馬場が東西に通っていて供に西側は柳馬場に突当る。中村馬場が突当った所に石敢当⑭がある。

柳馬場を北へ向い城の西端の寺田越から尾谷の林道に下り、浜子の集落を１０号線と併行しながら内山川の石橋⑮を渡ると赤谷への熊越の登り道になる。左側は１０号線の赤谷トンネルである。中程に、昔、喉を

うるおした湧水か所があったが、今は土が崩れ埋っていて水音のみが聞えている。

峠のみかん畑を曲りくねっていくと、10号線と２６８号線が接するところに壊れかかった石橋が残っている。ここが赤谷である。

１０号線沿いの「くつら荘」のあたりが赤谷の年貢米倉庫跡⑯で、道路前の川渕が舟積場である。「くつら荘」の西側を街道は小高い雑木山の中を２６８号線と併行しながら進む。梁瀬の端に出て浦之名川の渡し場を渡り、浦之名の一里山への道を登り、大淀川を左下に見ながら進むと去川への渡し場である。この道のりは約５Kmであるが、今も約７割が農道として使用されている。途中に藩主の休憩場があったらしいが判らない。下六の墓地の前の杉林の中に水神碑等があり、すぐ川である。川渕の竹やぶの中を上流へ１５０m位行くと渡し場らしい場所がある。このあたりより上流約１５Kmの間は、岩石が多く急流であり舟行は大変な難所であった所で観音瀬と呼ばれている。

これより約５００m下流に、３００年程前に設けられた御手山勘場⑰のあった山下の集落がある。

(2) 去川から高城桜木へ

去川の渡し場⑱は関所跡⑲より少し上流にある。関所は現在門柱礎石がわずか一基、国道１０号線脇に残っている。関所の敷地の一部は去川小学校になり、その西側を通る街道沿いに、関守であった二見家⑳が、当時の旅人たちを威圧したであろう大きな武家門・石積土手等を残している。

去川の関跡から約４００m進むと、国指定天然記念物の去川のイチョウ㉑がある。これより標高４００mの国見峠（高城町堺）を越えて岩屋野まで約１０Kmの道は、青井岳山系の峻嶮で今は人跡絶え道跡もわずかの老人が知るのみで、草木が茂り踏み込めない。

歴代の藩主が巡視の度に、又、旅人達もこの国見峠で休んだと言われている。

嘉永６年（１８５３）の島津斉彬公御道中記に「この地東目街道の内至極の高地、先年来御野立の場・霧島・桜島・救摩の山相見え、御眺望相応の処云々・」とある。

幕末文久２年（１８６２）生麦事件を起し、当時世界最強の英国相手に一戦を覚悟した島津久光公が飛ぶようにして帰った道もこの街道である。又、西南の役の官軍の兵士谷村計介の父親が鹿児島県庁へ出かける途中殺害されたのもこの峠である。

この道中記によれば「鹿児島下町札辻より女二里塚あり、都城境まで四里九丁、これより北にある四家へ間道が出ていた」とある。

国見峠より約2.5Kmで岩屋野の入口に下りて来る道の右側に山之神碑㉒がある。これに接して稲森宅の庭前を道は通るが、庭にあった井戸水を腹一杯飲んでから人々は峠へ向ったと伝へられる。道中記に「岩屋野後の七曲坂と言う是より去川迄皆山坂難渋に御座候」とある。

山之神碑よりすぐのところに御茶屋跡がある。殿様も休まれたと言うこの御茶屋前から南へ細い道が残っている。これは永野へ通ずる間道で数百メートル先に辺路番所跡㉓がある。

御茶屋から道は西へ約1.5Kmで国道１０号線七瀬谷検問所前を横切り内野酒店のすぐ裏を通る。これからは人一人のせまい山道で、薩摩峠㉔へ向う。国道を狭んで峠付近

までは松並木が大正末期頃まで残っていたそうである。行程約１Kmの薩摩峠を経て市野々の集落からは国道１０号線になって有水中学校まで続いている。ここには、昭和の始め頃まで松並木が残っていたそうである。市野々の集落の外れる所あたりに赤坂の古名がある。

有水中学校の端で１０号線から外れた街道は西へ曲り南へ下りて有水小学校の校門東の地頭仮屋跡㉕の東側に出る。有水小学校から約５００ｍ北に石塔㉖がある。道は国道のわずか西を併行して鳥居原㉗の峠で古墳の右側を通り南へ進むと香禅寺の馬頭観音堂に出る。石山観音の西側を通る山道を約５００ｍ登ると石山越古戦場跡㉘に出る。

石山観音池公園入口の国道脇に藩の寒天製造所跡㉙に出る。国道を横切って南へ進むと、諏訪神社鳥居前に出る。社前の諏訪馬場㉚は直線約５００ｍであり、旧国道の商店街に出るところから古くは門前町の高城野町㉛である。高城町の端が桜馬場下町口跡㉜で札辻と駅所があった所である。宮崎銀行高城支店から北へ進むと、不動寺馬場㉝で六地蔵幢がある。現在、商工会館、慶正寺になっている所が高城地頭仮屋跡㉞であり、高城城跡㉟（月山日和城）の下になる。城跡の背部の台地に前方後円墳を含む１３基の古墳㊱がある。

城を守るように、東・南・西の麓は士族屋敷で固められている。御仮屋馬場の北端には郷年寄を勤めた武家屋敷が当時の名残りを留めている。

高城は古くは三俣院と呼ばれ１３６０年代に今の名になったと言われている。

大手門跡から東へ約１Kmで高城郷宗廟春日神社㊲に至る。大手門を通って高城小学校裏を通るこの道は、高山彦九郎が泊った士族屋敷街で、そばに高福寺跡がある。南北朝期の三国名勝図会に、「高松山功徳院高称寺畠山治部大輔開基其年月詳ならず」とある。この士族屋敷街は当時七日市で賑ったと言われている。ここから桜木へ向う道に石敢当㊳が保存されている。このあたりから団圃で道がわからなくなるが、高城高校の運動場南東の端から東岳川を渡って桜木の南方神社に通じている。この間は、天文の戦及び庄内の乱の古戦場跡㊴である。

東岳川（古くは小山川）橋の下流を渡ると神社鳥居に道が出てくる。桜木の役座（やくざ）跡と呼ばれている庄屋屋敷には庚申塔が倒れている。桜木の集落を通り抜けると団圃で、川を狭んで都城市高木であり目前を国道10号線が横切っている。

桜木の集落の西端に霧島池㊵といって古来住民の霧島信仰の場所があり、わずかにその跡を残している。

宮崎を起点とする田野・山之口を経由する鹿児島街道がここで合流する。

花ノ木川㊶は古くは境川とも桜木川、又は、高木川とも呼ばれ下流で大淀川に合する。高城郷と都城領との境で、現在は改良工事で流が変っている。明治の初期には板橋が架かっていたとある。

(3)　高木から県境へ

花ノ木川を渡ると高木春日神社がある。国道沿いの人家の裏側を西へ併行してまもなく国道に合流する。高木は古い歴史を有する町である。

高桜橋付近から沖水川の手前まで約十里（約3.9Km）の間、松並木㊷が直線状に残っていて名物であったといわれるが、昭和10年代に消滅した。国道１０号線都北町交差

点付近に高木原御茶屋跡(43)がある。

都城駅ガード下付近から平江町(44)である。平江信号機から東へわかれる道は、郡元村・勝岡村を経て宮崎へ通ずる古道であり、平江町の南端から東へ進むと神柱神社がある。

前田橋(45)からは中央通りで、昔は入口に垂れ門があり、唐人町(46)・本町(47)と続く歴史のある町である。

牟田町通への交差点を東へ進むと都城最初の窯跡(48)がある。牟田町へ行くと、島津氏以前の都城を領有していた宮丸蔵人の館跡(49)がある。

中央通り上町から東へ進むと、蔵原通り(50)を経て飫肥へ通ずる寺柱街道が出ている。この付近は北口（広口）馬場(51)といって、札辻・垂れ門があり客室・横目座等があり、広口交差点の南側左の方に城内入口の北口番所、右の方に鹿児島下町札辻より十六里塚があった。街道は北口番所から西へ曲って松元馬場へ進む。

中央通りの道幅は昭和３７年に拡張されるまでは江戸時代のままであった。また、この通りを東から西へ２本の用水堀が通っているが、いずれも古く、正平年間(1350)と文明年間（１４７０）の工事になったものである。現在は、道路下を人目に触れることなく流れている。

中央通りの横道を西にはいると摂護寺がある。これが都城島津家の米蔵跡(52)である。

広口交差点から市役所へ数１０メートル進んだ角の左側に陸軍元師上原勇作の生家跡(53)があり、元師誕生碑がある。

市役所付近は、元和（１６１５）の下城以降から都城島津家の館跡(54)で領主の住居及び役所があり、回りはすべて家来の家敷で固め、三万九千余石の都城領を取り仕切ってきた中枢部で、御城内と呼んでいた。老中馬場・御門馬場・鷹匠部屋等の地名が残り、回りに東口・北口・西口の番所を置いて出入りを取締った。明治４年都城県が設置されたときの県庁もここに置かれた。又、市役所裏の図書館内に郷土館(55)が併設され郷土資料の展示を行っている。明道小学校は江戸時代の明道館の後を継いだものである。

街道は広口より西へ折れるが北側は片町と呼ばれた所で寛政年間（１７９０～）には交易所があった。

西都城駅の手前南から旧道のままの細い道で西都城駅踏切の手前に出て来る。その東側が西口番所跡(56)である。それより西へ岳之下橋(57)まで西町(58)であり、三重町・後町と呼んでいた。岳之下橋の南側川沿いに通船方の建物(59)があった。寛政年間（１７９０～）にここより宮崎赤江まで、７２Kmの舟路を設け物資輸送の事務をとっていた所である。

岳之下橋を渡ると右の目前の台地下に兼喜神社(60)がある。これより北に約５００mの所に二厳寺跡(61)、その北の川際に国府水流の処刑場があり、二厳寺の手前の谷奥が牢屋敷でズヤンタンと呼んでいる。

岳之下橋の西南に都城島津家の居城であった都城跡(63)があり、その南麓に菩提寺の龍峰寺跡(64)と天長寺跡(65)がある。又、城内に狭野神社(66)と都島旧跡(67)がある。

岳之下橋から街道は城の北端をまっすぐ坂道を登る。この坂は、龍泉寺坂とも、又、旧連隊に通ずるところから兵隊仲間では地獄坂といわれていた。左は取添城、右は護国神社があり、左右に古寺跡がある。坂の上西方に唐人何欽吉の墓(62)がある。

岳之下橋から約１Kmで鷹尾交差点で直進

すれば庄内街道で、旧連隊、現在の自衛隊駐屯所へ続く松並木道であった。北は志和地へ通ずる旧道であり、街道は南へ直進する。ほどなく財部街道が出ている。ここにも松並木があった。

国鉄日豊本線を渡り街道は城の西方を通るが、このあたりは下城以前の古い町の跡で、今の中央通り、西町の跡で、当時は一帯を本ノ原(68)と呼ばれた所で、古戦場の跡でもある。五十市小学校の前を過ぎると、道が二つにわかれるが西が街道である。下りそして上りの道で双方の坂を元服坂(69)と呼ぶ。幾分昔の風情を残す道である。

坂を登って国道と合流する。ここからしばらく国道を進むと一里塚跡(70)がある。道の南の台地が御茶屋跡(71)であり、他に幕府巡検使の休憩所もあった。これよりしばらくは見返り坂といって都城を去る人が見返り見返りして旅立つた所である。一里塚跡から約1Kmで鹿児島県境平長谷(72)である。ここも古戦場である。

(4) 宮崎から田野へ

宮崎市大淀川の渡しから南下し、中村町、横町、源藤を過ぎ八重川を渡ると清武町加納に入る。そして、加納追分で飫肥街道に分岐するがここまでは、薩摩街道と飫肥街道が重復している。日向地誌には「槇の札より2等道路に属する志布志街道南に岐る」とある。

追分から50m西方に大坪前川が流れている日向地誌に「大坪前板橋、千束溝に架す、長4間、巾2間」とある。千束溝とは、大坪前川のことである。

ここを更に西方へ約1,000m進むと池田である。ここまでは、今の国道269号と道筋はさほど変りないが、ただ加納神社付近は、鳥居前の道路が旧道である。池田から今の国道269号は、昭和28年に清武隧道ができると同時に南光院へ向けて新しくつくられたものである。

街道は、ここを西へ直進していたわけで、現在この道は、清武町道になっている。池田からこの町道を西へ約600m直進すると小川にさしかかるが、これは八重川上流である。日向地誌に「年の神坂橋、浜手溝に架す、長5間、巾2間」とある。この橋を渡ると坂になる。長門本平家物語の僧俊寛等が、鬼界島配流の道にでてくる「かなは坂」即ち、加納坂である。そして、この坂も往時の県道開鑿以前は、清武城主稲津掃部助の墓(74)の北側を通り、清武城本丸の真下(城内)に上っていた。

清武城は、清武川の断崖にあり、天然の要害を利用して築かれた伊東氏48城の1つであつた。付近には、清武城以前の古城の跡がここから連なる東方の丘上にあり、また北側には中山寺跡、観音寺跡などの史蹟がある。とくに、中山寺跡には文明17年(1485)、清武城で病死した伊東祐堯の墓(76)もあり、この一帯は城内と呼ばれている。現在、この城内を九州縦貫自動車道が堀切って通ることになり工事が進められている。

街道は、この城内の人家の間を下りて流町に出ていた。日向地誌に「流れ町板橋、流れ町溝に架す、長4間、巾2間」とあるが、この橋の手前50m付近で、県道蓮ヶ池郡司分線と交差する。そして、この県道を東へ約400mいったところに、国道269号の清武隧道口(清武側)がある。

流れ町から西は船引であるが、ここには船引神社(77)があり、その境内には国の天然記

念物に指定されている清武の大楠(78)がある。流れ町から南へ船引の田原を突き切って清武川にいたるが、この道沿に里程標（宮崎元標から２里）が建っていたが、昭和１４年の大洪水で流されてしまった。なお、この田原には、江戸時代から明治にかけて繁華を誇った町並みがあったが、度々の大洪水で今は全く姿を消し、水田と変ってしまった。九州縦貫自動車道が横切るところで、大正時代の地図に川原町と記入してあり、宿屋３、酒屋３、料理屋２、医師１、染物屋３、鍛治屋２、仕立屋１、菓子屋１、駅馬者１、米屋１、大工２、瓦焼き２、荷馬車引き１、床屋１、石工１、質屋１、砂糖ねり１、襖張り１、材木商１、薬屋１、左官１、木挽１、他は農家で明治１９年の大洪水までは、もっと多くの家が軒を連ねていたが、度々の洪水で家を流され、正手や船引に転居していった。「流れ町」の地名も、この川原町にあった家が、洪水で流れ町に流れついたことが、その起りだといわれている。

清武川には、日向地誌によれば中川原板橋が架かっていた。即ち、「中川原板橋、鹿児島街道清武川に架す、長３０間」とある。以来ここには木橋があり、主要な橋梁の１つであったが、昭和２８年下流に清武隧道、清武橋ができてからなくなった。そして最近、その上流約２００m付近に九州縦貫自動車道の大きな橋が架かった。

清武川の堤防をはさんで、船引の庄屋黒木七左衛門が開削した正手用水路(79)がある。日向地誌に「池の内土橋、鹿児島街道正田溝に架す、長１間、巾３間」とあるのがこれである。

街道は、これを渡り西に右折直上していたが今の国道はその南側を蛇行して上る。この正手の丘上は、清武城の出城があったといわれ、井手ヶ城の地名が残っている。この正手の台地を走る国道はほぼ街道筋であるが、大久保に入る手前で今は九州縦貫自動車道が下を貫通し、立体交差する。ここから西へ約１Km行くと大久保の分れ道があり、県道大久保、木崎線の起点である。そして、この大久保分れ道のすぐ手前に、岡川支流の後川がある。日向地誌に「大久保下の板橋、鹿児島街道後川の下流に架す、長６間、巾９尺、欄干あり」とあるのが、ここで後川はこのすぐ下流で岡川と合流している。

大久保を過ぎ、平山の坂を上って畑の中をしばらく行くと沓掛に入る。この間の道筋も、現国道とほとんど変りないが、沓掛の入りこみから現国道は、集落の中を突き切っている。旧街道は、稍南側をまわり集落の出はずれで合している。この旧道に道標(80)（里程標）が建っており「距、宮崎元標、３里」と刻んである。

沓掛の旧道と現道との合する附近から田野町二っ山まで大きな松並木があったが、終戦直前これらの老松は、軍の松根油採取のために伐られてしまった。日向地誌に「沓懸西畔より田野村二つ山に連なる松並木あり」とあるのがこれである。

昭和４０年１０月、日向沓掛駅が新設されるまでは、この附近は畑地帯であったが、その頃から町営住宅を始め住宅が建ちはじめ、今では沿道にスーパー、自動車修理工場、消防署（南出張所）、清武自動車学校が建ち並んでいる。そして、この自動車学校正門と国道をはさんで清武村、田野村の境界標(81)が建っている。

(5) 田野から青井岳天神嶺へ

大久保あたりからなだらかな上り勾配が続きやがて田野との行政界に入る。加納の飫肥街道との接点から約１３Ｋである。

「日向地誌に云う今泉村界より二ツ山まで６７町の間松並木あり二ツ山より左に岐れて那珂郡板谷に至る道あり藩治の時官道たりと」この松並木も昭和１０年頃までには殆んど失われてしまった。

二ツ山の集落の中程より旧道は西に別れて畑の中を直線的に走り、国鉄日豊線を踏み切ると梅谷城址の南側に出る。畑の中のこの旧道は昭和５３年の耕地整理で消滅してしまった。ここより約１Km北に字空池があるが十年戦争の古戦場と云われている。

城跡の東側から急坂を谷川に下ると幅１間半位いの細長い田圃や荒畑が幾枚となく続いているが、これが旧道の名残りだと古老が教えてくれた。

ここから井倉川を渡り田圃を突切ると井倉の集落に入るこの道も消滅して形跡がない。

二ツ山で別れた鹿児島街道は県道２６９号線として梅谷の坂を下り日向地誌に云う梅谷板橋、井倉板橋を渡り井倉で旧道と落ち会って町の中心街を通る。街の中頃に天建神社(82)がある。そこから約５００ｍ街の西はずれに学ノ木駅跡(83)がある。明治の頃は戸長役場があってかっては町の中心をなし駅馬車の駐車場があり他村からの買物客で賑っていた。ここから東北に堀口を経て穆佐高岡へ、鷲瀬を経て清武宮崎へ所謂別府田野往還があり、西北に八重を経て飛松から山之口へ、この道は俊寛上人の流旅の路、そして野崎を通じて去川の関へ、何れも島津領内に入る間道があり、又南に南那珂郡の板谷を経て飫肥・都城に至る藩治時の官道があった。そして西南戦争の時、薩軍が陳地を構築して配兵し官軍に抗した所もここであって扇の要的な要所であった。

学ノ木から約1.5Km行くと町はずれとなり、ここから坂を下ると清武川に出る。松坂板橋(84)を渡ると、北の山嶺に上ノ原城址を望むことが出来る。

約２００ｍ進むと麓の集落に出るが、ここより片井野越え無頭子に至る旧道が通っていて水神様(85)はその登り口にある。鹿児島街道は西に向い七野の西入口で街道を跨いだ水路橋(86)をくぐるとここから山合いの道となるが、ここを旧道が交叉して西の方塩水越へと伺っている。

溪谷と山岳の僅かな隙間を縫って曲りくねったこの街道は改良されて近代的幹線に蘇ろうとしている。水路橋から約２Kmの所に国体の射撃場(88)が新設されてこの道に漸く文化(87)の光が訪れたのである。この手前に道標が立っている。

南へ約６００ｍの処に塩水の集落があるが標高２００ｍで然も日向灘から数里を遠ざかるに海水に等しい塩水が出て古くから湯治場として賑っている。

国体射撃場から殆んどカーブが取り除かれて道は平坦化し、所々に古き道のカーブが切り捨られて残っている。しかし街道が境川を望むあたりからは未だ改良が加えられずにいる。

射撃場から約2.7Kmして猪谷トンネル入口に着く。鉄道が通らない前はこのトンネル入口が竹井茶屋(89)のあった所である。境川の山之口町との行政界までは約８００ｍで、改道記念碑(90)が境川橋の袂にある。

(6) 青井岳天神から山之口麓へ

ここ天神領は青井岳の山塊が重畳として

横たわり境川の幽谷を挟んだ天然の障壁である。

そして道の行く手を渡り人々の往来を拒み続けながらも、道は深い溪谷の僅かな隙間を縫って蛇行し、又峻嶮な山の尾根伝いに踏み固めて進んでいる。この難渋の道は時の移り変りと共に幾つかの道筋を造り、今又新らしくこの街道に並行して高速道路が生まれようとしている。

鹿児島街道はそのまま国道２６９号線として五十山川沿いに進み約3.5Km程して上長野の峠に着くこの峠で無頭子から来た旧道と交又している。

ここから下り坂となり山之口麓まで続いているがこのあたりから国道の大々的な改良工事が行われ、又南側真向いには東岳川を挟んで高速道路の工事が国道に並行して進められている。

山は削り取られ、むき出しにされた山肌が白く鈍って続き、人の行き交うた小さな路は今や巨大な近代道に押しつぶされてその変貌は驚くばかりである。

峠より約1.5Km程下ると、この鹿児島街道と高速道路に挟まれて、やがて廃道となる道の上に太子様の祠(93)が取り残されていた。移転した太子様はそこより６００m街道脇の奥まつた安全な場所に還座していた。更に約1.5Km下った所に五反田番所跡(94)が右側にある。

この鹿児島街道の下敷となった古い道は五反田付近で約5.6mこの街道の東下を通っていたようであるが、今は所々にその痕跡を残しているだけで、畑となり造林地となって殆んど消えていた。東岳川で山之口橋を渡ると麓の集落に入るが、すぐ南側に地頭仮屋跡(95)があり地頭馬場はその前にあった。

この付近には武家屋敷の名残が未だに残されていて、山之口・高城・勝岡の三郷を治めた城下町を忍ばせている。ここから東北に見える山嶺は山之口城址(96)で、その西麓に走湯神社(97)がある。

一の関渡(98)しは城址の北麓、大古内川にのぞみ、地形上要所であったことが伺われる。駅馬車がおかれ、又駅村標柱(100)のあった駅は街の中項麓保育所の曲り角にあった。

この麓の街に生れ継承され保存されている文弥節人形浄瑠璃(101)は無形民俗文化財として県の指定をうけている。

(7) 山之口麓から高城桜木へ

鹿児島街道は麓の集落のはずれから国道２６９号線と分岐して国鉄日豊線を踏み切り、麓小学校前を通る藩政時代は霧島街道と呼称していたようで、これはこの台地の道は遮ぎるものなく霧島連山を一望することが出来る。又、道筋に霧島六所権現社が祀られていたことに由来するといわれている。

又の名を佐土原大道(104)ともいい、万治２年（１６５９）に植えられた松並木は昭和の戦争に供されて失われてしまった。

麓小学校南側田圃の片すみに、草むらに埋まった墓石と自然石が目につく。天保二年（１６８２）と刻まれているのが漸く判読出来る平凡な石であるが、土地の人達は「魚の目」の神様と信じ崇めている。

道は平坦で、畑の中を突走り高城町との境界を過ぎると、向原（高城原）に出る。

やがて桜木の集落に入るが、麓の分岐点から4.8Km、高岡から南下して来た高岡往還（国道１０号）と落ち合い鹿児島街道として都城に至っているのである。将軍神社(105)は合流点より南２０mの処にある。

(8) 山之口麓から都城へ

山之口の麓で、鹿児島街道と別れた国道２６９号線は日豊線の東側、山手北側を並進して王子山にある山之口小学校正門前に出ている。

これ以前の古道は穏番所[102]を通りこの山手の南側を王子山へと抜けているが、現在この道は農道として利用されているだけである。そして新しいバイパスが鉄道線寄りに直進し山之口駅に結んだのは最近のことである。山之口小学校は王子城跡に建っているが校庭の西片隅みに、「すじどんの焼石神」が祀られていた。

山之口役場は花の木の南はずれ十字路にあって、その敷地内に村是を記した「一心記念碑」が建っている。ここより南へ約１Km所謂富吉へ抜ける三股往還筋に兼重神社があって腹切どんの墓石[107]はその社の前にある。ここより南東約２００ｍの小高い山は松尾城址[108]である。

三股往還を更に西南へ約８００ｍ進むと的野八幡宮[109]の鳥居前に出る。雄塚の古墳[110]はここより西５００ｍ日豊線の手前にあって、奈良時代に栄えたと云われている新町跡は近くにある。

国道２６９号線が花の木で日豊線を踏み切ると間もなく右側に円墳を思わせる小高い丘[110]が見える。頂上には馬頭観音が祀られていた。ここから花木川を渡り又樋口川を渡ると三股町との行政界で田島のかくれ念仏洞は南の方日豊線脇に、又念仏禁制開教初説立地が上森の集落にある。

この国道２６９号線は明治３４年に開設されたとあって歴史的な遺産は至って少ない。境界から８００ｍ蓼池集落の国道右脇に蓼池のかくれ念仏洞[112]が保存されている。ここからすぐ十字路になってその四つ角に大正４年に建てられた道しるべ[113]があった。

日向地誌に云う北桜木から南西郡元の境に至る隣村往還はこの道であろう。この十字路の北西約３００ｍの畑の中に経典読踊記念塚[114]がある。

平坦で田圃の中を直進して来たこの道は沖水川を郡元橋で渡ると軒並の続く市街地に入る。そして道しるべから約3.5Kmの所で島津稲荷社[115]の鳥居の前に至る。暫くすると今市から来た旧道が郡元郵便局前に出て来て国道２６９号線に結んでいるが、道は都市の区割整理で少々の変更はあっても大筋に於ては変っていない。

都城本駅の所で日豊線と立体交叉すると道は鉤状に曲って都城の中心街に入るが、元々この道は直線で袴線橋の左下を通り、神柱神社[116]の横を抜けて、南下して来た鹿児島街道に結びついているのである。

鹿児島街道が清武加納の追分から出発して山之口麓で分岐し国道２６９号線の明治の道で都城に至るがその間約４８.５Kmの道程であった。

(9) 山之口麓から勝岡・郡元へ

山之口麓から勝岡を経て郡元に至る藩政の道は容易に見出す事が出来ない。

山之口町花の木から富吉・餅原と南廻りの三股往還道は今は開通されて勝岡に出ているが、古道として、又、藩政の頃の幹線としては諸説で取り上げられていない。

山之口町の麓から霧島街道即ち鹿児島街道を西に進み、高城原を過ぎて寛光の集落の手前あたりから東へ進み、上森を抜け花木川を渡って蓼池に至る道、古い地図には林と畑の符号の中をこの道が示されているが、今は耕地整理がなされ住宅が点在して道と

しての痕跡は殆んどなくなっている。

蓼池で国道２６９号線を横切り原田の熊野神社（キノエ権現）の西脇から餅原に入り後原の東を通って「かまど神社」の鳥居前に出る。

西へ３００ｍ勝岡城跡[117]の西北隅を迂回して平地に下ると勝岡地頭館跡[118]に出る。ここより西北の台地が調練場[120]のあった所、今は町施設の体育場となっている。

地頭館から西へ沖水川に至る間は、約６００ｍはあろうか、整理された広大な田圃がひらけていた。

沖水川で今市橋を渡る。日向地誌に云う今市板橋[121]はその上流約１００ｍ、都北衛生センターの下流に架せられていたようである。

今市橋を渡ると新馬場から郡元に通ずる道に結び西進すると郡元の郵便局前で国道２６９号線と合流する。

早水神社[122]や祝吉御所跡[123]はこの合流した地点から南に１Km日豊線沿いの南側にある。

(10) 田野から高岡へ

鹿児島街道の国道２６９号線と、薩摩街道つまり、高岡往還の１０号線とを南北に結ぶ往還に山之口から高城に至る道があり、もう一つは田野と高岡をつなぐ県道日南高岡線がある。

当時の薩藩の街道取締りは厳重を極めて、特に薩摩街道の去川道は他国人を通さず、一般人は田野越へ、又は紙屋廻りにて薩摩往還へつないだと云われている。更に同藩には一例をあげると領内間道を利する国禁の砂糖持ち出し取締りがあり、飫肥領田野郷への抜荷のあった事が記されている。

これ等のことから察すると、田野に至る間道は飫肥領へつなぐ唯一の道であったものと想像される。

学の木駅のあった所から北に日豊線を越えると屋敷の集落に入る。旧道は今の日南高岡線より約４００ｍの西寄りを通り、西北に借屋城跡[125]を望む陣之元橋に出る。ここから伊東塔建立[124]の小高い岡が右側にみえて三角寺の集落に入る。屋敷、大将軍、三百部、陣之元等の小字名を残しているのは借屋城にまつわる名残りであろう。

旧道は三角寺の街はずれで県道日南高岡線と交又し東に迂廻して松山川に出ている。

迂廻した道は田畑となって消滅している。

日南高岡線は萩ヶ瀬橋を渡ると松山川の北沿いに岩石の断崖を開さくして通っている。この岩石は大正５年の日豊線路の礎石として切り出され、その後を道として利用し今日の日南高岡線として改良されたものである。旧道はこの断崖の上を通り殆んど山嶺を県道と併行しながら北進して堀口の集落に至っている。旧道の一部は林道として利用されているが堀口の集落に入るあたりは道は消滅していた。

県道は改良整備されて近代道に一変している。

堀口の集落の「番人さん[126]」が分断された旧道の四辻に立っているがもう振りむく人も居ないようである。

ここから高岡町との行政界は近い。旧道は太鼓橋を渡って内ノ八重の集落内に入る。

改良なった新道は集落の東側を通り旧道と交又して柞の木橋で再び旧道と接している。

百石橋[128]はその近くにある。又柞の木橋番所跡[129]は、清武町椎屋形に通ずる約５００ｍの処にあって、その途中に近代的な塵埃処理場中部衛生組合環境センターがある。道は再び東西に別れて進みながら約７００ｍの処で交又し、新道は東北に蛇行して山田池[130]

西畔に下り立っている。ここから平坦な道となって上倉永の集落の中心部に入る。算術塚(131)は上倉永公民館の横左路上にあった。

この道は東に迂回しながら穆佐城下(132)の麓の集落に至っている。柞の木橋より約5.7Kmの道程である。

旧道は新道の西側山嶺を尾根伝いに北に向っているが道の痕跡はあっても嶺線の道で進むことは容易でなかった。

「弥五郎どんの足跡(133)」だと云う凹地は新旧道が先に交叉した地点から２００ｍの処にあった。

暫く行くと旧道は平谷新道開設によって約２０ｍ、あまり堀り割られ、分断されて通ることが出来なくなっていた。道は更に尾根伝いを北に進み湯谷の西側を下り、穆佐城址南麓に出て新道と合流している。誕生杉(134)は城址の西隅みにある。穆佐小学校のプールの処が穆佐番所跡(135)と云われその前の川に「番所橋」が架っていた。

新道は西北に進み小山田の集落に至ると左の小高い岡に島津豊久の墓(137)がある。月知梅(138)はここから約2Kmの所にあって約５００ｍで大の丸橋に達する。

一方旧道は小学校プールの角から西へ山伝いに進み東京慈恵医科大学の創設者高木兼寛生家の下を通り小山田の集落より少し急坂な山道に入る。

山の中腹に穆佐神社(139)があり３００ｍ程すると墓所に出る。江戸相撲の力士雲乃井権九郎はここに眠る。ここから高岡名産のミカン園がこの高台に果しなく広がって一大景観を呈している。

ミカン園の入口に罪人の処刑場(140)だったと云われる「ハタオンバ」がある。この道は作業道として活用されている。坂を下ると大淀川南岸の高浜集落である。頭を欠いた地蔵さんが処々に祀られているが花の供えはなかった。

旧道は大淀川に架かる大の丸橋で月知梅から来た新道と落ち合い川を渡って高岡往還（国道１０号線）に結んでいるのである。

大の丸渡し(141)は大の丸橋より１００ｍ上にあった。

田野の学の木駅より山伝いに続いたこの間道は凡そ２５Kmの道程であった。

曽って宮崎城主上井覚兼が田野で狩猟を催した折穆佐の城主がこの道を通って参画したのは天正１４年の頃である。

4　街道沿いの文化財

国富町＜東諸県郡＞

①　薩摩街道本庄口

六日町通から本庄川の渡し場へ出る筋は三筋あって何れとも決め難いが、対岸の嵐田榎崎の街道によく連絡しそうな、即ち仲町交差点信号機より東へ約９００ｍ松元一竜氏宅角より南へ下る。筋が、より多く利用されたと思われる。

②　嵐田の渡し場

嵐田榎瀬は東の宮崎との境に在る本庄川の渡し場で、旧高鍋藩年貢米倉庫前の川渕にあった。

日向地誌に「本荘往還に属す綾川にあり、巾４２間平水深３尺５寸渡舟一艘あり」とある。

③　榎瀬の年貢米倉庫跡

山本半次郎氏屋敷にあり、その跡は竹林となっている。

山本家はその倉庫番の役目をしてい

た家柄ですぐ北側に本庄川があり渡し場跡である。

④　嵐田の六地蔵幢

嵐田集落の北端・田圃に面した道角の大師堂脇に江戸時代の石塔、墓石群の中に六地蔵幢はある。

碑銘

奉造建立六道能化地蔵大士為花紅乗蓮信士菩提㝡宝暦三□西□九月廿四日　江藤氏欽言

⑤　嵐田神社

旧嵐田村村社で祭神は大已貴命である。この辺りでは「デメジンサン」と呼んでいる。

昔は秋祭りには村の歌舞伎芝居が掛り演芸類一切御法度の島津領内の高岡郷の士族達が大勢押し掛けて大変な賑いだった由、その日はこの士族達が祝儀を振舞って、村では料理を作り、旦那様扱いのもてなしをして、盛大な秋祭りだったと云われる。

近くの公民館の広場に芝居の師匠だった人の功徳碑が建っている。

⑥　本荘勘場跡

県道本庄橋北岸にあり、舟積場である。当時は倉庫や役所があったのだろう。本庄川の舟を利用しての宮崎までの物資輸送は綾方面からのも加えて相当賑やかで、明治・大正の頃まで下りは櫓で上りは帆を掛けて数隻ずつ連なって通る風景が見られたらしい。

⑦　境野峠

旧薩摩領と高鍋領との境にある標高１００ｍの丘陵である。街道は頂部に於て南北に通じていたが、現在県道は東西に通って、交差した形ちになっている。

明治２７年３月に東諸県郡の県議一議席をめぐって高岡側と本庄川とが、この峠で何れも数百人が対決し流血騒ぎを起したことがある。

高　岡　町＜東諸県郡＞

⑧　処刑場跡

建設省高岡出張所の北２００ｍの所にあり、供養碑が倒れ残っている。電力送電塔の処が首斬場の跡と言われ、処刑者に家族が泣きすがりながらこの丘まで付いてきたと伝へられている。

銘（正面）

南無妙法蓮華経　　法界万霊

如来　㊎　神通之力

唯我　㊎　能為救護

（側面）

天保四已年十月吉辰造立之

松尾山本永寺廿三世

㊎　行阿闍梨日嘉代

⑨　高岡城（天ヶ城）

現在の高岡小学校の北側に位置する。

慶長５年（１６００年）関ヶ原の戦に敗れた島津義弘は帰国の途次、国境のこの地に城を築き防備を厳にするよう命じ、士族７００余名を移住せしめた。

天ヶ城と称し、六つの砦より成っている。元和一国一城令により、廃城となった。今は公園となり町民の憩の場となっている。

⑩　角太屋　㊐

国道１０号線沿い高岡町にある。裏は大淀川堤防である。

高岡には、清水家、水間家の豪商がいた。角太屋は清水家の屋号である。江戸初期頃仲町へ移住して来たが、その後大淀川水路利用の商取引が盛んになって、現在地に移った様

である清水八郎衛門が又享保九年（１７２４）江戸への材木積舟で遭難し、八丈島へ漂着した記録がある。

裏庭には大きな倉庫が建ち並び川岸（現在堤防）は舟着場で繁昌したと云う。ここから小舟で宮崎港（現在ホテルフエニツクス附近）で千石舟に積替えたと云う。

⑪　大手門と内山神社

慶長５年築城の際、鹿児島稲荷大明神を分祠、城の守護神をして勧請した。

大正の初め、現在の場所に移され内山神社となった。神社の左脇道が大手門である。

⑫　武家屋敷通り　㊞

士族屋敷は、家・門塀からなるが、その構え方は厳格に規定されていたようである。この辺りは、その面影を残している区画である。

手前の角屋敷は、中村馬場の吉富家であるが、特別に藩の許可を得て作った石塀である。

⑬　河上家武家門（町指定）

高岡小学校内に保存されている武家門である。

高岡の武家門は、禄高により、長屋門・八十石未満引戸門・八十石以上観音開門の３種とされている。

この河上家は禄高２８０余石の弓術の指南家として高禄武家の門構えで、型や使用材料等優れたものである。

高岡小学校の前身は練士館で嘉永５年創立され、郷士の子弟の学問、武抜を講習する場であった。

⑭　高岡の石敢当

中村馬場が柳馬場に突当った処の民家の石垣の内に組入れて残っている（当時のまま）。古来中国から薩摩の国に伝った風習で、災厄等が入り込むのを防ぐ意味のものである。道がＴ字型になっている処に必ず建てられた石碑で鹿児島から移住させられた士族達によって始まったものであろう。（南国諸島の風俗である。）

⑮　内山川の石橋　㊞

国道１０号線内山橋より綾に通ずる県道を西北へ３００ｍ行くと左側に養鶏場がある。ここから下の田圃への道が街道である。養鶏場より数十ｍ先に、内山川の石橋が架かっており、街道の橋として貴重である。

この地方には多くの石橋があったらしいが今も健在で使用されているのはこの橋だけである。しかしこれも痛みが甚しく支柱の一部が倒れかゝり、一部は流失し今にも崩壊寸前である。

⑯　赤谷の年貢米倉庫跡

国道１０号線と国道２６８号線の分岐点を過ぎると２００ｍ足らずで右側に「つくら荘」と云う料理店がある。ここが米倉跡で大淀川がこの前で湾曲して大きく入りこんで来ている。又旧国道がつくら荘前から岐れている。

薩藩では小林以東の年貢米はこの赤谷の倉庫に納入する仕組みのようであった。高岡郷には赤谷の他に浦之名・高浜・入野に米倉があった。

米倉は殆んど川沿いに建てられ舟積みに便利を計った。

赤谷も倉前に舟積み場があった。

⑰　御手山勘場跡

去川より下流５００ｍ南岸の山下の集落にある。

この集落の西端を１０号線がかすめて通る。又旧国道が集落を通っている。

御手山勘場とは今より３００年程前、こ

の付近の島津藩主の手持の山で木炭を製し輸出するための積出用の倉庫や役所等を設けた処である。江戸前期に於てこのような経済政策に取組んだ事は注目すべき事である。

明治以後は民営事業として、数軒の勘場があり、昭和初期までは賑わったと云う。

⑱ 去川の渡し ㊐

高岡町立去川小学校下の去川関所跡より僅かに上流が渡し場の跡と云われている。

対岸からオーイと呼ぶものならそれこそ打首もので、舟が来るまでだまっておとなしく待っているものだったと云う。

⑲ 去川の関跡（県指定史跡）

当時の関は国道１０号線脇の高岡町立去川小学校々庭及び国道を含み、下の川岸までの一帯であった。

今は国道下に門柱礎石一基が残っている。

天正年間（１５７７）伊東氏を駆逐した島津氏はいち早くここに関所を設けた。最も峻烈な関所として、怪しきは斬殺、追返す等旅人に恐れられた処である。

「薩摩人いかにやいかに苅菅の関も戸さゝぬ御代としらすや」と高山彦九郎が歌った関所はここであるとも云われる。

⑳ 去川の二見家 ㊐

去川小学校の西側を通る街道沿いにある。

去川の関設立当初に関所御定番として二見岩見守久信が勤めて以来明治初めまで連綿３００年１２代に亘り関守を勤めた。

同家は薩摩士族の中でも格別扱いで去川の地を領地として与えられ関所役人も総べて同家の家来であった。

当時、道行く旅人達を威圧したであろう大きな武家門、石積土手、藩主が泊られた武家屋敷等又、御部屋前の庭には殿様の駕籠台の石組がそのまゝ残っている。

㉑ 去川のイチョウ（国指定天然記念物）

去川の関所跡から都城へ向かう街道脇（二見家から約６００mの処）に根元の周囲約１１.７m、目通り幹囲４約１１.１５mのイチョウの巨木がある。このイチョウは島津１７代島津義久公が植えたと伝えられている。樹令約４００年の雌株で、昭和10年に国指定の天然記念物となっている。

高　城　町＜北諸県郡＞

㉒ 岩屋野の山之神

国見峠を高城側におりて来た所に山之神があり、ちようど岩屋野の集落入口になる。

行き来の旅人が、安全を祈っては拝んだのであろう。街道に面して稲森信夫氏宅がある。

庭に井戸が昔はあって、峠を越す人は皆ここの井戸水を腹一杯飲んでから出かけた由

碑銘

奉寄進御山神宮

宝暦十一巳□四月

㉓ 岩屋野の辺路番所跡

岩屋野より永野へ通ずる間道の番所で辺鄙な場所にある為、遍路番人として住んでいた最後の子孫が近頃遂に岩屋野の集落へ引越して来ている。

嘉永６年に領内巡見に来た島津斉彬への案内書である御道中記の中に次の項がある。

岩屋野辺路番人三人居住

御扶持米壱石八斗宛成し下され候

岩屋野の山田商店前より小さな道が南へ延びて、僅かに残っている。

㉔ 薩摩越と赤坂 ㊞

「田尾の欄干、赤坂越えよ、さつま峠の色もみじ」

土地の古老の幼い時の聞き覚えの歌である。もみじの季節には彩り華やかに旅人の疲れをいやしたことだろう。

国道１０号線が七瀬谷交通検問所を過ぎて、すぐ右側に営林署有水事業所があり、その後側にある山が薩摩峠である。

道中記には

1. 峠越に鹿児島下町札辻より女一里塚有り
1. 赤坂と申す所有り南は深谷を北は野岡往古は街道の南谷上まで深山にて、猪・鹿住し候由……この辺、市野々と申し候。

赤坂は今の市野々の外れから霧島ドライブンの手前辺りである。

㉕ 有水地頭仮屋跡

道中記に

田尾御仮屋跡（旧は田尾村と云っていた）

高城地頭仮屋より一里廿三町、東西街道辰の方に御門跡が有り、当分畑四反一畝余、右は正保、慶安の頃、此処に御仮屋召建てられ、元禄十年丑三月火災に依り都べて焼失…同十三年、高城和田へ、本仮屋地之召し直され候。

有水小学校本門前から東方の有水駐在所手前の小道および南は国道を含み、北側通りまでの広い一画らしく、その中の吉留氏家屋敷がその中心であったようである。

㉖ 有水の石塔

有水小学校正門前の通りを北へ田辺の集落へ通ずる道と有水中学校南側の道と会する北角の小高く古木が残っている下に石塔が倒れている。

① 石塔残欠

銘

奉建立山神石社一宇為二世安楽之

願主　伊藤源太左ヱ門

藤原信吉

② 奉供養庚申　現世安穏往生善処

慶安元年子十月二九日

他に久林寺、大道寺住職名

多くの名あり

㉗ 鳥井原

道中記に　　鳥井原御立場

小石塚有り、諺に霧島山東門の真中に当り、往昔霧島山二の鳥居有る為の由、故に此の辺を鳥居原と申し伝え候。

鹿児島下町札辻より廿里有

以上から推察すると、現在の県指定古墳は一里塚ということもありうる。なお、古墳の処に石塔が１基ある。

街道は古墳のすぐ脇を真直に南へ、馬頭観音堂あたりまで残っている。有水の万年橋から石山へは坂道となり、両側切取りの中程から、西の畑の中を行く。

㉘ 石山越古戦場跡

街道より分れて石山寺に行く道５００ｍの途中にある。

伊東方高城々主八代長門守は島津連合軍の猛攻に会い敗走の途中、石山越で主従３８０余人が討取られた。

道中記に

「石山越　天文年中伊東方高城を落去の節此所之追詰め八代長門守を初め討取り候由右遺跡を標し候杉これ有り候処枯損当分御座なく二間廻りの野塚、西方定満潭池、三方は湿田にて御座候」

今は野塚は僅かにその形態を残しており、

且杉の切株が残っている。

㉙ 石山寒天製造所跡

道中記に

「干藻製造場街道側左右に有り、支配人指宿浜崎大平次、此の辺三ケ国に稀なる厳寒の地にて干藻製法仕り候」

支配人浜崎大平次は幕末調所笑左エ門と組んで薩藩経済に貢献した海運業の豪商である。

干藻製造は、石山観音池公園入口の国道筋に標柱が立つのみで、今はその面影は何も残っていない。

又、この他に有水中学校手前から東へ入った星原の集落（山之口町境）にも寒天製造所跡がある。

㉚ 諏訪馬場および諏訪神社

諏訪神社は享徳4年（１４５５）の創建と言われ、天文年間北郷氏が再建している。

社前の諏訪馬場について、道中記には、「長さ五町、天文十年、伊東北原と北郷忠相攻め合いの時、敵味方許多戦死の場と言い伝え、其の亡霊の為建立の大石六地蔵これ有・・・。」

今はこの六地蔵は見当たらない。

高城町通の西端近くから北へ一直線に通るのが諏訪馬場で突当りが諏訪神社、社頭鳥井より左が街道である。

㉛ 高城野町跡

今の高城町のメインストリーである。八坂神社前から諏訪神社へ曲がる手前１００m位までを言う。

道中記によれば、

「高城野町、東西弐町三拾八間、男女弐百八人、質屋壱軒、酒屋壱軒、糀屋弐軒、焼酎屋壱軒、油屋壱軒…。

当町の者共柔術に出精致し、御用の者捕方に罷り出且他領え聞合に出又は関外表より御用の者共差上げられ候節、縄抜替等相勤め旁々御取訳を以て、天明5年より名頭だけ苗字書き下し並びに脇差御免仰せ付けられ候云々、又自他国旅人止宿の節は宿屋相勤め申し候」とあり、街道筋の面影をしのばせる。

㉜ 桜馬場下町口跡

高城町の端にある八坂神社に庚申塔と明治年間の道路元標があり、ここが御仮屋入口である。

ここには、札辻と駅所があった。

道中記に

1. 桜馬場下町口に札辻有り
1. 駅所、人馬次所にて郡見廻昼夜勤番

とある。

㉝ 不動寺馬場と六地蔵幢

高城宮銀支店脇の道を北へ入った処が不動寺馬場と言い天文元年（１５３２）、高城を守る伊東氏と北郷忠相との大激戦の跡で、伊東方城主は敗走し、７００余人が戦死した。もと不動寺があったが、合戦後死者を弔って北郷氏が高称寺を移建した。

ここに六地蔵幢が立っているが、高城郷の役人であった新穂氏が正保4年（1647）立てたものである。（天文の合戦とは関係ない）

銘

真言得果　正保四年即身成仏

十月十四□敬白

㉞ 高城地頭仮屋跡

地頭仮屋は、一時有水に移され、元禄13年に再び高城に置かれ、明治まで続いた。その間度々藩主の御泊所になった。国境に接する要衝の地であるため道中記には、

「急変寄方に付いては、地頭仮屋の上、池の城に於て鉄砲三発両貝を鳴らせ候えば郷士兼て用意の要具持参にて不時に仮屋に馳集り、旨議次第張出申す可き覚悟云々…」とある。

高城郷　　惣高九千五百余石
　　総人体二千六百余人

城の下にあって、現在は商工会館、慶正寺になっている。

㉟ 高城城跡 (写)

一名月山日和城とも言い、八城からなり三俣院の千町歩を抑えるかなめの城である。

長久元年（１０４０）和田氏が居城してより、吉野朝時代から戦国末期まで、肝付、畠山、島津、伊東、北原、北郷、各氏がこの城をめぐって凄惨なる攻防戦を繰返した。史上稀なる古戦場跡である。

㊱ 高城町古墳群（県指定史跡） (写)

高城城跡の背部牧ノ原の台地に、前方後円墳、円墳等１３基があり、ここからの霧島の眺望は良い。

北諸地方最大の古墳群である。

㊲ 春日神社 (写)

農協高城支所より東へ１Km足らずの処にある。

荘園時代は神社例祭日には市が立ったと云う。

祭神、天児屋根命、経津主神　他

本社は天徳二年（９５８）に大和国の春日大明神の分霊を奉祀し爾来領主並に民衆が厚く尊崇してきた。

道中記には「宗廟春日大明神」とある。

又三国名勝図絵には「天文元年（１５３２）の不動寺馬場の戦の時、春日山より白鳥二隻出て戦場の上に飛降る。我軍以て神助として奮戦大いに敵兵を破り」とある。

㊳ 七日市の石敢当

七日市の士族屋敷街は幾分昔の面影が残っている。ここから桜木へ向けては耕地整理された田んぼになって道跡は判らなくなるが、旧道のしるしとして、民家のブロック塀に石敢当が組み込まれ保存されている。

石敢当は中国五代の晋の勇士の名で、後世その名を石に彫って守護神とした。

㊴ 小山川原古戦場跡

桜木の集落北側を流れる東岳川を古くは小山川と云った。

小山川より北、高城高校辺りまでは、安和井ケ塚、大楽等古戦場の跡である。

天文１１年（１５４２）伊東軍と北郷軍が合戦。

慶長４年（１５９９）の庄内の乱では北郷軍が計略に陥り３００余人討死した。戦死者の一人中原中常坊の墓が現存している。

川の南岸は小山城跡で伊東方の出城であった。

㊵ 霧島池

桜木の集落の西端、田圃に面し、高木町を目前にする処にある。信仰遺跡である。

庄内盆地に４８の小池が存在し、そのほとりに霧島社が分祠されたと云われる。

石碑一基が立っているだけである。

都　城　市

㊶ 花ノ木川（境川）

都城領と高城郷の境を流れる川で古くは都城高木側では高木川、高城桜木側からは桜木川とも呼んでいた。

慶長年間庄内の乱のとき、首の川とも言った。討取った首でも洗ったものであろう。

木橋が架かったのは明治になってからで、それまでは浅瀬を渡ったようである。

日向地誌高木村の項に「町口板橋鹿児島街道に属す、高木川に架す長２０間、巾１間、欄干あり、又道巾３間」とある。

㊷　高木街道松並木　㊐

高木町交通信号機（高桜橋）附近から沖水橋手前まで約一里弱の美しい松並木が昭和１０年代まで残っていて高木街道（タカツケド）の並木（ナミツ）と呼ばれ愛されていた。

㊸　高木原御茶屋跡

都北町交差点付近にあった。

この辺りは昭和１９年頃まで美しい松並木が続いていた処である。

この御茶屋には宝暦３年（１７５３）に藩主重年公、昭和４年（１７６７）には同重豪公が何れも江戸の帰りに休んだ記録がある。

㊹　平江町

宮崎よりの国道１０号線が市街地に入り込む処に日豊線の跨橋がある。その付近より６００ｍの区間が平江町である。

明応４年（１４９５）頃伊東領のとき、高木町に出来た町で北郷氏領となり之和下城新地移りの頃、現在の処へ移ってきた町である。

古くは三日町、八日町からなり、昭和初年は下町と呼んだ。

町の入口には垂門があった。又日向地誌に「高木村字平江町」とあるのは旧平江町のことである。

㊺　前田橋

前田町と中町の境を流れる年見川に架る橋で江戸時代には竹之下橋とこの前田橋の二つがあった。

庄内地理誌に「長サ二間、広壱丈弐尺古来は土橋」とある。

寛永１９年（１６４２）上使御下向のとき橋を架けた記録がある。

明治７年農民暴動のとき、農民をおどす為前田橋際にもってきた大砲が農民によって川に投入まれたという話がある。

㊻　唐人町跡

前田橋を渡って１００ｍ位の地点より大丸デパートを過ぎて牟田町との交差点までを明治初年まで唐人町と呼んだ。

天正１７年（１５８９）と正保３年（1646）の２回に亘り都城領大隅内之浦に漂着した唐人達の町である。

第２回目の漂着者の何欽吉は医術の心得があり、藩に重用された。又和人参の発見者として有名であり、その墓は県指定史跡になっている。

明治７年税の金納について、都城農民の約5,０００人が暴動をおこし、この通りで２人が斬殺された。気勢を殺がれた農民は退却して鎮静に向ったが、首謀者２０人は５年から１０年の懲役刑に処せられた。

尚前田橋近くに垂れ門があって、土地の者はタレンシタと呼んだ。

㊼　本町跡

唐人町の次が本町で今の上町の大部分である。又本町の呼名は明治初年までである。

本町は約５００年前、庄内町の安永城下に出来た町で、文明八年（１４７６）頃都城城の西に移され、元和下城新地移りのとき、ここに移ったのである。

町の入口は今の田中書店の北筋に垂門があって夕方より朝までは閉門になった。

垂れ門の西は高札場、東へは飫肥に通ずる寺柱街道になる。

又唐人町との境が志布志往還である。

㊽ 油澄所と焼物所跡

東銀座通り蔵原町富重眼科医院より東、北の一画である。

焼物所は領主直営で、天明3年（1781）薩摩陶工の指導を受けて設けられた後、民営に移されたが、業績振わず、数十年で廃止になった。

油澄所は焼物所に隣接して同じ頃出来た。なおこの通りを油屋小路と呼んでいる。

㊾ 宮丸蔵人道時屋敷跡

中央通り牟田町との交差点から西へ500m、金光教教会の所である。

天授元年（１３７５）二代目北郷氏が都城を築くまで、この地を領して居た豪族が宮丸蔵人である。

初代北郷資忠は宮丸蔵人の娘を娶った。蔵人は当時都城を居城としていたと云われるが、所領を北郷氏に譲り隠退したのが此の地と云う。なお宮丸家の菩提寺の興金寺もここにあった。石塔がこの裏に残っている。

㊿ 蔵原通り 写

中央通り上町田中書店前から東へ延びている通路である。

昔、領主蔵があった処からこう呼ぶようになったと云われる。

都城から隣藩飫肥へ通ずる寺柱街道筋に当り江戸時代幕府巡検使等が度々に通った道である。

現在も当時の道巾（5.4m）を残して居り、古い家並みは旧道を感じさせる。

(51) 北口（広口）馬場

上町田中書店の北筋より約４００m裁判所へ通ずる十字路までが、道幅が最も広くなっていたのでこう呼んだ。このほぼ中間が現在の広口交差点になる。

交差点南に石橋が、左角に北口番所がありこれより城内になる。又、一里塚があり鹿児島下町より１６里であった。

田中書店の前側は横目座、客屋、馬継所、高札場があった。又本町垂れ門よりは蔵原馬場を経る飫肥への寺柱街道が出ている。街道は北口番所から右（西）へ松元馬場へと行く。

(52) 米蔵屋敷跡（市指定史跡） 写

今の摂護寺が都城島津家の新米蔵屋敷跡である。中央通り宮銀都城支店の横筋を西へ入った突当りである。

元禄１２年（１６９９）に設けられた米倉で、その当時からのものかは判らないが、古い門が残っており市の指定文化財となっている。又戦後まで門前には堀が残っていた。

(53) 上原元師誕生地

広口交差点から市役所の方へ数十m先左側にあり、右脇に上町派出所がある。

都城が生んだ陸軍元師子爵上原勇作（安政3年生）の生家跡である。陸軍参謀総長、陸軍大臣の要職についた。

元師は常に郷土都城発展の為に尽力し、その熱烈なる郷土愛は都城人士の常に忘れることの出来ない人物として敬愛され、後年遺徳を偲び誕生碑をこの地に建てた。

(54) 領主館跡

国道１０号線沿いの市役所及び明道小学校の敷地一帯が、元和（１６１５）以後明治維新まで２５０年間都城領主島津氏の館跡で３９,０００石、領民２０,０００人余を取り仕切った役所等があった処で、家臣の屋敷が周りを囲み城内と称し、東・西・北に番所を設けていた。

老中馬場、御門馬場、鷹匠部屋等の地名が残っておる。

廃藩も置県により明治４～６年に都城県が設置されたとき、ここに県庁が置かれた。その記念碑が市役所敷内に国道に面して建っている。

㊺　都城市立郷土館

市立図書館に附属する施設である。

昭和４６年６月竣工　建築面積６４１.９㎡

鉄筋コンクリート１階建

当館は古い歴史と伝統をもつ都城盆地一帯の自然及び政治、経済、社会、民俗などの各分野にわたる歴史資料をはじめ、現在及び将来に関する資料を収集保管して、広く一般の利用に供し展示する。

年間数回特別展等を行っている。月曜、祭日は休館。

㊻　西口番所跡

西町踏切より市役所へ通ずる道の右側、平田宗正病院の辺りである。

寛文元年（１６６１）藩主の命で東・西・北の三口番所を置くようになった。

庄内地理誌によれば

1.　御目附様御通りの節は白砂へ罷出しやがむ

1.　明和二年（１７６５）ホウソウ流行に付当所四ヶ所之内番所取締被仰せ渡し趣有之

1.　疑しき旅人、托鉢体の者一切差通間敷候

又番人は付近の屋敷通りを掃除することも命令されている。

㊼　竹（岳）之下川橋

西町と都島町の境を流れる大淀川（竹ノ下川）に架る橋である。

昔は都城一番の大橋で高岡往還及び大隅より飫肥への幕府巡検使の道筋の橋として重要であった。

延宝９年（１６８１）洪水で流れた記録がある。又庄内地理誌に「大橋長３６間広２間上使於此川橋之名御尋候は竹之下川橋と御答可申旨…」

橋が出来たのは元和下城後と思われるが、前田橋が寛永１９年（１６４２）にはある処から、その頃か、以前であろう。

㊽　三重町、後町

西町踏切から岳ノ下橋の区間である。

島津氏が九州平定のとき天正１４年（１５８６）都城領主北郷氏が大分県（豊後三重郷）の郷民７００余人を捕虜として連れて来て設けた町である。

島津氏は豊後攻略に於ておびただしい捕虜を（女、子供も含む）各領内に連れて帰ったり、又は国外へ売払ったと云われるが、歴史の哀話である。

元和新地移り以前は城の西方に町があり、元禄５年（１６９２）こゝへ移転した。

㊾　通船方跡　㊐

西町西端大淀川岸、岳ノ下橋の南側にあった。寛政年間（１７９０）都城より宮崎赤江まで大淀川を利用して物資輸送を行った。その役所で又船問屋、船頭小屋、舟大工小屋、積込場、倉庫等もこの辺りに並んでいた。

㊿　兼喜神社（市指定有形文化財）

岳之下橋を渡ると右の目前台地の下に鳥居がある。

祭神は都城１０代領主時久の長男北郷相久で庄内町の金石城々主であったが、父子の間に奸臣の策謀等あって父時久は兵を発して我が子相久を殺した。

その後、異変が続き、相久の祟りと恐れ、鎮魂の杜、寺を創建した。

戦国期の肉親相闘の悲劇である。

この社殿は江戸中期の建造のようであるが、桃山時代の様式をよく残しており、市

の指定文化財になっている。

⑥1 二厳寺跡

兼嘉神社前の竹之下馬場を北へ５００ｍの所に在る。

応永２２年（１４１５）秋江和尚の開基の名刹であったが、今は寺はなく、墓のみ残る。秋江和尚は都城を築いた北郷義久の二男で戦乱に明けくれに無常を感じたのか仏門に入り鎌倉五山の一つ円覚寺で修業した。

室町文化の開花せんとする時、中央にあって之を吸収し、都城にもたらした功績は計り難く、都城学問の祖といえよう。

歴代領主の庇護厚く今も１２代領主北郷忠能公夫妻及び秋江和尚の墓が残っている。

⑥2 何欽吉の墓（県指定史跡）

何欽吉は明国広東州の人、正保３年(1646)大隅内の浦に漂着したが、都城に来て、医を業とし、領主に待医としても仕えた。和人参を山中で発見した事は現在でも高く評価されている。

西墓地内にある墓石は自然石である。

碑銘　業山心恒居士何欽吉墓
生於大明広東海県逝千万万治
元年戊戌九月二十九日

⑥3 都城城跡 ㊐

市街地の西、大淀川に架る岳之下橋の西南に在る。城と云っても石垣、天守閣のあるものではない。天授元年（１３７５）北郷義久が築城したと云われるが、それ以前宮丸蔵人道時の居城であったとも云う。

後年築城の分も加えて城の内区（丸）の数を九、城の周りに五の口（出入所）を設け地頭を置いて固めた。

築城の翌年は早くも今川勢に包囲され、１年近く籠城、死闘を繰返しで城兵は殆ど討死し、落城寸前、島津氏久の決死の突入によって救われた。

文禄４年（１５９５）伊集院氏か城主となったがまもなく庄内の乱を生じ、再び北郷氏の居城となり元和一城令で廃城した。

⑥4 龍峰寺跡

岳之下橋を渡って左（南）へ都城城跡下の旧国道を６００ｍ位で、島津墓地があり、こゝが寺跡である。

都城８代領主北郷忠相が創建（１５００年代頃）した北郷氏代々の菩提所で、寺領百石であった。

明治初年廃寺となったが、島津家一族代々の墓及び家臣達の墓が多く残されている。

⑥5 天長寺跡（市指定有形文化財）

島津墓地より３００ｍ南にある。

今は歴代住職の墓石とこの地方では珍らしく、廃仏毀釈の難を免かれた石仏群が保存され、市の指定文化財になっている。

天文７年（１５３８）領主北郷忠相が財部攻略に功績のあった舜叡和尚をもって開基とした祈願の道場であったが、明治初年廃寺となった。

⑥6 狭野神社

都城城跡、本丸の西にある二の丸跡（西の城）に鎮座する。

この都城城跡は古来、神武天皇御幼少の頃の高千穂の宮跡として尊い崇されて来た処で、現在都島旧跡として、塚が保存されているが、この上に須久束大昭神の祠があった。都城最古の神社といわれている。

築城（１３７５）のとき往民参拝の便の為に城外に移されたが、昭和１５年皇記2,６００年奉祝事業として旧地に移転した。

⑥7 都島旧跡

都城城跡は古来都島と云われていた。北

郷氏入城前は宮丸蔵人道時が居城していた。

都島は古くより高千穂の宮跡として尊崇されて来た。狭野神社の前身である須久東大明神はここに鎮座していたと伝えられる。

高千穂の宮は神武天皇御幼少の頃御成長になられた処とされている。

昭和１５年皇記2,６００年奉祝事業として文部省の聖跡調査を受け整備顕彰された。

⑱　本ノ原

五十市小学校前の通りから東方、都城城跡手前辺り迄を云う。

領主在城の頃は町のあった処である。宮崎城主であった上井覚兼は天正１０年４月５日鹿児島より来て、本ノ原の別当（部当）の家に休み領主北郷時久父子を城に訪問し酒席で歓談したことを日記に記している。

又天授二年（１３７６）鎮西探題今川軍が本ノ原に本陣を置き都城城を包囲して攻撃したが、翌年三月囲みを解いて退いている。

⑲　元服坂　㊐

五十市小学校より南へ５００ｍより下り坂になり又上り坂となって登りつめた処で１０号線に合流する。

この上り、下りの坂、約４００ｍの区間が元服坂である。

昔、領主の子息が鹿児島で元服式を挙げるのに旅立ちを家来達が、ここでお見送りした処からこう呼ぶようになったのだろうか。

この辺りは領主の御茶屋、巡検使の休憩所、等もあり、鹿児島から都城の出入りの際の歓送迎場になっていたようである。

古老の話によると小学校付近より県境まで松並木があったようである。

⑳　一里塚跡

元服坂と国道との合流点より国道を250ｍでバス停「一里塚」があり「ホテル都」の処が一里塚跡である。

終戦後の台風で倒れるまで大杉が両端に立っていた。

庄内地理誌に

「鹿児島下町札辻より十五里」とある。

この辺りから県境まで約１Kmは見返り坂と呼ばれた。都城がはるかに見えて、都城を後にする者は見返り見返りしながら歩いたところと伝へられている。

㉑　元服御茶屋跡

元服坂一里塚跡、即ち「ホテル都」の裏の台地が茶屋跡である。

庄内地理誌によれば享保７年（１７２２）太守継豊公東目筋御帰国の時、この地へ御茶屋が出来、その後宝歴３年、明和４年太守が休憩されている。

㉒　平長谷

都城市と鹿児島県末吉町との境即ち国道１０号線に沿う県境集落である。旧は平波瀬と言った。

天授２年（１３７６）都城の西、本之原に本陣を構え都城城を包囲していた今川軍勢に背後より攻撃せんと島津氏久は梅北方面より進入し、この平長谷に陣を張り軍列を進めた。氏久は城兵と相呼応して今川軍を攻め、落城寸前の都城を救けたのである。

㉓　今町一里塚（国指定史跡）

今町一里塚は都城から志布志に通ずる国道２６９号線沿い県境より約１Kmの処にある。志布志往還にあった一里塚で天保年間幕府巡検使通行のとき鹿児島下町札ノ辻より３３里町木を立てている。

薩藩では宝歴３年（１７５３）高岡筋に町木を立てているので志布志往還はその後であろう。

清　武　町＜宮崎郡＞

⑭　稲津掃部助の墓

加納の平担だった道も、年の神の浜手溝を渡ると急坂となるが、この急坂の中程に稲津掃部助の墓がある。

稲津掃部助重政は、胆略人に優れ、また軍機に鋭く、１９才で伊東祐兵の小姓となり朝鮮出兵の際には供をして功を立て、25才で家老となり、清武地頭に任ぜられて清武城に住した。

慶長５年（１６００）の関ヶ原合戦に当り、伊東氏のために黒田如水と謀り、留守の諸城を攻略せんとして宮崎城を攻略したが、合戦後幕命によって宮崎城を元の延岡城主高橋氏に返した。２年後の慶長７年10月伊東氏の怒りをかい、討手を受けて清武城で自刃した。

⑮　清武城跡

加納の坂を登りつめると清武城跡である。

清武城は、自然の丘地を利用した平山城で伊東氏の４８城と呼ばれた城の中でも、山西への押えとして最も重要な拠点であった。即ち、西南より攻め来る島津氏に対する守りであったのである。

⑯　伊東祐尭の墓

清武城跡の西北、中山寺跡の西側に伊東祐尭の墓がある。祐尭は、伊豆から日向に下向した伊東氏の宗家祐持の４代目の孫で、父は祐立、母は宮崎土持氏であった。

文安元年（１４４４）父祐立の死後、都於郡城主となり、次第に四方を征して武威を振い、財部土持氏を亡ぼして、北は日知屋、門川城を取り、県（延岡）を攻めることしばしばで、土持氏を遠く県庄に圧迫した。また、南は山東から山西を席捲して島津氏の北上を押え、同氏と飫肥を争って、しばしば激戦した。

伊東氏にとっては、日向に強力な地盤をつくつた英主であった。

⑰　船引八幡神社

城内から急坂を下りると船引の集落に入るが、この街道の西方に船引神社があり、日向地誌には次のように記されている。

「船曳神社、村社、社地１段２畝２１歩、寛治元年（１０８７）丁卯創建する所なり、足仲彦尊、長足姫尊、誉田別尊を祭る。旧名八幡宮、明治４年辛未今名に改む。例祭１０月３１日。」

なお、この神社には、船引神楽及び船引臼太鼓踊りが伝承され、清武町の無形文化財に指定されている。

又船引に伝わる「きよたけ破魔太鼓」も近く町の無形文化財に指定されることになっている。

⑱　清武の大クス（国指定天然記念物）

船引神社の境内にあって、樹令約９００年、目通り幹囲１３.２ｍ、高さ３５ｍの大楠で県内一と云われている。昭和２６年６月９日に国の天然記念物に指定された。なお、この下にヤツコ草も自生する。

⑲　正手用水路

船引村の庄屋、黒木七左衛門が開削した水路である。

黒木七左衛門は、若くして船引村の庄屋となったが、清武川筋の荒地を開き、また水利の悪い正手に水を引くため、清武川筋の断崖に隧道を開削して水路を通し良田とするなど、生涯を村民のために尽力し、明

治６年、７８才で没した。

日向地誌に「池の内土橋、鹿児島街道正田溝に架す。長１間、巾３間」と記されているが、正田溝とあるのは、黒木七左衛門が堀った正手水路のことである。

⑧⓪ 里程標 ㊢

清武と田野との中間に沓掛があり、当地を通る旧国道筋に里程標が立つ。この里程標は損傷がひどいが正面に距宮崎元標３里清武村大字今泉、左側面に学之木へ１里22町、裏面に明治３４年１０月と刻字は読める。

元標は県庁本門の西方約３００ｍの所にあった。又この種の道標は船引田原（２里の地点）と梅谷板（４里の地点）にも立っていた。

沓掛は古くからある集落で、宮崎城主、上井覚兼の天正１１年（１５８３）４月７日の日記に「拙者は清武之内くつかけと申村に留候」とある。また、沓掛の山王神社には永正１０年（１５１４）８月と刻まれた小さな仏像が祀ってある。

⑧① 田野・清武村界標 ㊢

清武正手から沓掛を経て二つ山に行く国道２６９号線は、ほぼ薩摩街道である。清武町と田野町境はわずかながら上り坂になっているが、村界標が立っている。正面に田野村清武村境界、左側面（清武側）に清武村境界、裏面に明治４０年９月建設と刻まれている。

沓掛から二つ山に至るこの道筋には、終戦直前まで見事な松並木があったが、軍の松根油採取のために伐られたことは惜しまれる。

日向地誌の今泉村の項に「沓懸西畔より田野村に連なる松並木あり」また、田野村の項に「今泉村界より二つ山まで、６～７町の間、松並木あり」と記されている。

⑧② 田野天建神社

田野町と清武町との町境を過ぎると、下り坂となり、梅谷川と井倉川を渡ると田野の街に入る。

神社は街の中心部よりやや東寄りにあるが、もとは百済の王を祀る大宮大明神で仏堂園の田の中にあった。これに大已貴命を祀りて田野神社と改称し更に天児屋根命を祭神とする天建神社を合祀して現社号に改めたものである。

祭事は誠に盛大で「甘酒祭り」とも称し、近隣からの人出で賑う。

⑧③ 学ノ木駅跡

天建神社から西に７００ｍ進むと学ノ木の集落に至る。明治の頃は戸長役場があって、町の中心をなし、駅馬車の駐車場があった。駅村の標桂が立っていて、宮崎へ４里２２町２２間と刻まれていた。

ここは律令国家の官通として救弐駅が想定され、又鬼界島配流の僧、俊寛もここを通ったのではないかと言われている。北は、野崎を経て去川関所へ、南は板谷を経て飫肥へ至る交通の要所であった。

⑧④ 松坂板橋

学ノ木より５００ｍ街のはずれから下り坂となる。急坂を蛇行しながら進むと持田川と別府田野川が出合う所に出る。合流して清武川となるが、松坂板橋はこの合流した処にあった。

日向地誌に「鹿児島街道の音松川、持田川相会する処に架す。高一丈餘、長２４間幅１間半欄干あり」とあり、一里毎の道標もここにあった。今は両河川に夫々架橋され、蛇行していた道も直線的になっている。

㊺ 水神様

松坂板橋より右に上ノ原城跡を見て西に進むこと1㎞で麓の集落に着く。東に突き出た山は、「ひだかん城」と言い見張所にもってこいの地形で字名を小番所と言っている。

片井野越えをして無頭子に経る旧道の入口そばの田の中に水神様が祀られている。土地の人の話によると昔偉い人が馬諸共この井戸に落ち、それ以来井戸を堀るのを忌み嫌ったと云う。

㊻ 水路橋

麓より1.3㎞七野の集落より西に通じる道が鹿児島街道と出会った処に、街道を跨ぐ石造りの太鼓橋が架った。大正3年に建設されたもので高さ5.5m、長さ12.2m幅3mの水路橋で青井岳無頭子の境川を水源地として延々7㎞、流れを絶やすことなく、50余町歩の水田をうるおしたのである。

今は道路改良のため、この古風な水路橋は姿を消して新しく造り変られている。

㊼ 唐仁田の道標 ㊨

麓の集落から道は山間部に入る。ここからは上り坂の曲りくねった道が続いている。このつづら折りの道も殆んど改良されて昔の面影はない。

道標は日豊線をくぐり200m先の右側に立っている。

距　離　宮崎元標六里
山ノ口へ　四里四町
学ノ木へ　一里拾参町参拾口間

明治34年10月の建立である。

㊽ 国体の射撃場

道標から600m道路の北側に山間部を利用した宮崎県ライフル射撃場が新装となっている第34回国民体育大会の射撃場として全国の人々を集めた。

人通りも稀で野獣の通ったこの鹿児島街道も市街地並の道路に変貌して昔日の面影を見出すことは出来ない。

㊾ 竹井茶屋

ライフル射撃場のある塩水から1.5㎞西に進み日豊線を横切ると境川の南岸に出る。ここからの道は未だ改良されずに狭い。更に1㎞行くと日豊線の猪の谷トンネル入口に出る。ここは田野と山之口のほぼ中間で竹井茶屋があった。馬車の駐車場があり、相方からの客馬車で賑わった。又郵便物もここで取り次されていたと云う。

猪の谷の溪流はすぐ横を流れており水は夏でも冷たい。

㊿ 改道記念碑

猪の谷駐車場から境川を望むとその谷合に国民宿舎青井岳荘が見える。ここから約800m程で天神橋に着く。田野町と山之口町との行政界で橋のたもと田野側よりに高さ約2.5mの大きな記念碑が立っている。

山之口と田野とを結ぶ街道の大改修に寄せる住民の悲願が明治31年に漸く曙光をあびて34年にその目的を達成した西村住民の感動の碑である。学ノ木駅からこの行政界まで9.5㎞である。

(51) 天神川板橋

天神川は境川とも言う。境川はその名のとおり田野町と山之口町を境する。又藩政の頃は伊東、島津との藩界でもあった。天神川板橋は境川橋と日豊線の鉄橋との間に架っていたようである。

日向地誌に「鹿児島街道天神川に架す。高さ七尺、長七間、幅一間餘」とある。この川を渡れば諸県郡山の口郷である。

山之口町<北諸県郡>

⑫ 妙寺ヶ谷番所

天神川板橋から青井岳駅の前に出て約30m進み、踏切を渡ると番所跡は直ぐ右側に在る。今は鉄道が通り住宅が立ち並んでいてかってここに番所があった要路とは思えない。

ここから西は山之口町麓の「一の関渡し」に、北は飛松番所に通ずる。

青井岳の嶺が迫る番所跡の上を旧国道が通り、ここはもう鬼山峠である。この番所は島津領と伊東領との接点にある重要な番所であった。

⑬ 日当瀬の太子様祠

天神板橋から上長野の峠まで3.5Km、ここから下り坂となり道路の改良工事が進められている。峠から1.5Km坂を下ると、道下の山腹に祠がある。安置されている弘法大師像は寛政5年(1794)の頃牛が疫病で斃れるので田野町塩水ヶ谷に祀ってあたこの太子様を貰いうけてこの地に祀ったと云われている。

⑭ 五反田番所跡

太子さんの祠より1.5Kmで日当瀬集落に入るが、途中道路右側に番所跡がある。

寛永14年設けられた番所で永野、三十山からの道がここで出合い無頭子に至る交通の要所である。

五反田は古代の班田収授制の名残りである。この道も改良工事が終ると廃道になる。

⑮ 地頭仮屋と地頭馬場跡

鹿児島街道が麓の集落に入るとすぐ左側に元役場跡があるが、ここは藩政期の地頭仮屋跡でもある。山之口、高城、勝岡の三郷を治める地頭所は鹿児島に在ったので、重要事項は早馬で知らせた。

地頭馬場は仮屋から北の方向に当り、今は空地となっているが、一朝有事の際に心掛けて日を決めて調練を行ったと云う。

⑯ 山之口城跡 (写)

城跡は走湯神社の北方、東岳川と古大内川に囲まれた丘陵地にあり、天然の要害をなしている。

山之口城は一名亀鶴三石城ともいう。城の東西に尾根筋があって亀の尾、鶴の尾と呼んだからである。

建武以来土肥実重の居城で明広4年(1496)伊東甲祐が一時この城を奪ったが慶長の初めより伊集院忠棟が居城した。伊集院領内12砦の一つである。

⑰ 走湯神社(町指定有形文化財)

五反田番所跡から1.2Kmで城山の南麓の走湯神社に出る。境内には樹令600年を経た大杉群があって山之口町の文化財に指定されている。

建武4年(1337)山之口城主土肥平三郎実重が伊豆の走湯権現を勧請に建立したもので村の鎮守として崇敬を集めている。

祭神は大名特命、天照里大神、少名産命、豊姫命である。

⑱ 一の渡関所跡

山之口城の北西、古大内川の手前にあった関所で藩治の頃島津氏が設けた。郷内で最も厳重な関所で「切り寄せ」とも言っている。元和元年(1615)古河内に建てられたこの番所は山之口番所と呼び、天和4年(1684)には一の渡番所、文政6年(1823)には再び山之口番所と呼んでいる。

古大内から鬼山越えをして飛松に至る街道はここで初めて大古内川を渡るから一の

渡しと云ったものであろう。

⑨⑨ 亀甲の石散当

麓の集落の国道より北側地区に亀甲（かめんく）と云う地区名がある。桝状に区割りされていることから亀甲といわれていて、国鉄日豊線が当地区を分断している。

亀甲の石散当は道の奥まった所に魔除けとして立てられ、石敢当と刻まれている。

高岡の石散当と同じく晋（中国）の勇士の名で石に刻み、守護神とした風習の一つである。

昔は処々に残っていたようだが、今は一つだけ残っている。

⑩⓪ 山之口駅の標柱

麓の集落の中央麓保育所に曲る角にあった。道路の改良工事で取り除かれ、二つに折れて放置されたものを地元郷土史家の手により保存されている。一辺が３０cm、高さ１m９０cmの可成り大きいものである。

距離　宮崎元標　拾里四丁　山之口駅
学ノ木へ五里拾七丁拾八間
都城へ参里拾八丁弐拾弐間参尺

⑩⓵ 麓の文弥節人形浄瑠璃（県指定）

山之口麓には文弥節人形浄瑠璃が伝承されている。

この浄瑠璃は一の渡関の関守が勤務の暇に習い覚えて広めたものと云われ、文政９年（１８２６）の古文書を残している。

演目は近松門左ェ門の「門出八島」と「出世景清」の二番があり外に間狂言の三つが入る。

文弥節は古浄瑠璃の名手初代岡本文弥がはじめたもので全国でも五ヶ所しか残っていないもので県の無形民俗文化財に指定されている。

⑩⓶ 隠番所跡

地頭仮屋跡から南へ２５０m麓集落南はずれの旧道沿いにある。ここからは南東の川内にも出られ、更に三股、大野方面にも峠越えの道があって交通の要所に当っている。

今は田圃と化し、道路脇の杉の古木が当時をしのばせるだけである。なお、すぐ南側を高速道路が東西に走り、旧道を遮断している。

⑩⓷ 保食神社

麓集落の中ほどより南へ４００m、字宮下の小高い岡の上に在る。藩政時代農民によって建立されたもので馬頭観音様とも呼んでいる。

農耕の神様で中でも牛馬の神様として崇敬されている。

春祭りに奉納される太郎踊は有名で、山之口町の無形民俗文化財に指定されている。

⑩⓸ 霧島街道（佐土原大道）

鹿児島街道は麓集落の西はずれから国道２６９号線と分岐して国鉄日豊線と交差し麓小学校前を通り高城町桜木に向っている。この道は藩政時代「霧島街道」と呼称していて、大井手から山之口駅へ通ずる道と交差しているあたりまでを「佐土原大道」とも呼んでいた。延宝４年（１６７６）佐土原の島津主膳から山之口地頭に領内巡見の知らせがあって、急遽道を補修し整備されたことから斯く呼ばれるようになったと云う。

⑩⓹ 桜木の将軍神社（町指定有形文化財）㊸

佐土原大道、即ち鹿児島街道が桜木の内下の馬場で高岡往還（国道１０号）と落ち合っている処にある。

将軍神社と云うのは、勝軍地蔵を祀った

からでこの地蔵に祈願すると戦火と飢饉から免がれたと云われている。ここに神社を常明寺を建てたのは、室町時代の始め頃、当地を治めた桜木氏である。

⑯ 王子どんの焼石神 写

国道２６９号線のバイパスが国鉄日豊線東側沿いに一直線山之口駅に至っている。駅前通りを南東に２００m行くと山之口小学校があり、校庭の西北隅に王子神社が祀られている。

太古の昔霧島山が噴火したとき王子達がこの小高い山に避難して来られた。土地の人は噴火時の焼石を御神体とし、「おじどん」と呼び祀った。

⑰ 腹切りどんと兼重神社 写

松尾城跡の西麓にある。

松尾城攻防の時肝属兼重は松尾城の救援に赴いたが、敵の大軍ほ抗し難く、危地に落ち入り死せんとするところを、松尾城の守将上原長門守が、「我こそ兼重なり」と腹を切って兼重を救った。

腹切りどんの墓は社前左側の五輪塔で、当初からのものかどうか不明だが、刀の切り跡らしい裂け口が残っており、忠節ぶりをしのばせる。

⑱ 松尾城跡 写

山之口役場から南へ１Km富吉に至る三股往還筋にあって自然の丘陵に築城されたものである。

建武３年（１３３７）の頃松尾城が畠山直顕と島津貞久に攻められ、救援に来た肝付八郎兼重が逆に窮地に追い込まれたが、城将上原長門守の身代りによって一命を得たと云われている。

明広４年（１４９６）より伊東氏がこの城を領していたが、天文３年（１５３５）北郷氏に攻めとられ以後、北郷氏の領するところとなった。

⑲ 的野八幡宮

腹切りどんの墓より富吉に向って７００m、的野の集落の十字路に至る。そこから東へ２００m参道が続いている。

的野八幡宮は和銅３年（７１０）の建立で三俣院の総鎮守として肝付氏、島津氏、伊東氏との支配者は没っても崇敬された。今は円野神社と云って弥五郎どんの祭で有名である。

又神体の右下には弥勒寺が建てられて住職の外別当役もいた。なお、この寺にあった神代文宝の石柱は現在円野神社にある。

⑳ 男塚・女塚と新町跡

的野八幡宮より西へ十字路を通り越して約２０m進むと道の左に男塚・女塚と言われる古墳がある。この塚は七段になっていて上段に円形の塚があり、全体として大きい。

ここから更に西へ２０m国鉄日豊線の手前に「新町跡」の標柱が立っている。今は畑となっているが、この当り一帯が新町跡で奈良時代諸県地方唯一の町として栄えた処と云われている。

㉑ 向原の馬頭観世音

国道２６９号線が花の木で国鉄日豊線と交差し、ここから４５０m進むと道脇に饅頭型の小高い丘があり、馬頭観音はこの頂に祀られている。

今この山は土取り場となって観音様は平地に下りている。又延喜式駅路の一つ水俣駅跡がこの踏み切り附近西河原に推定されていて、駅馬が通り、納米を運ぶ馬の行き来が盛んであった。向原の馬頭観音はこれら駅馬を供養するためのものと云われてお

り、馬越、蔵ケ迫の字名からも古代からの道であることがうかがわれる。

三　股　町＜北諸県郡＞

⑫ 隠れ念仏洞

国道２６９号線が蓼池で高木と勝岡を結ぶ道と交差するがこの十字路の手前２００mの道路脇にある。島津藩の一向宗禁制にも拘らず、信者は地下に隠れて阿弥阿如来像を拝み、仏飯講と云う講仲間を作って、弾圧に抗しながら信仰した。

為政省３００年にわたる。

信者への苛酷なる弾圧は「血吹き涙あふるる」の碑文で想像されよう。

⑬ 道しるべ

隠れ念仏洞から２００m進むと十字路即ち蓼池交又点に出るが道しるべはその西角に立っている。

大正４年１１月御即位大典記念碑として立てられたもので

正面に　右都城へ一里半
　　左山之口へ一里
右面に　右山王原梶山へ一里
　　左高城へ　一里

⑭ 経典読誦記念碑

蓼池交又点から北西へ３０m畑の中に径1.5m、高さ1.5mの塚があり、そこに経典読誦記念碑が立っている。中央正面に「奉読誦大乗妙典…」、右に「願主龍巣泉公」、左に「永祿３年霜月」と刻まれている。

都城島津藩主、忠相公のために大供養が行われたものではないだろうか。一千余巻の大乗経典を読誦したことから当時はここに相当に大きな寺があったことが想像される。

都　城　市

⑮ 島津稲荷

国道２６９号線で郡元橋を渡ると間もなく稲荷神社の鳥居前に出る。島津の祖忠久が摂津で生れた時稲荷明神の加護があったので建久８年９月に摂津の住吉稲荷を勧請に建立したものである。この地を島津と云うので俗に島津稲荷と称するようになった。

本殿は享保１４年（１７２９）のものと考えられ江戸時代の建築技術を残し、又所蔵の木造神面には永和５年（１３７９）の経年銘がある。

⑯ 神柱神社

島津稲荷から約３Kmで国鉄都城駅、神社は駅の南に在る。

太宰大監であった平秀基が当地に来て島津荘を開き、万寿３年（１０２７）島津庄総鎮守として伊勢神宮の祭神を勧請し神柱神社と称した。

祭神は天照大神・豊受大神である。

境内の道をへだてて招魂社があり、外に西南の役の招魂塚がある。

三　股　町＜北諸県郡＞

⑰ 勝岡城跡

勝岡城は三俣八外地の一つで蓼池の交又点から南へ２Km勝岡の南寄りの自然丘陵にある。明広４年（１３９５）伊東、島津両氏の和議により三俣院千町と共に伊東氏に譲られた。

永正１７年（１５２２）都城領主北郷忠相が梶山城を攻略してからこの城をめぐり攻守激戦が続けられ天文３年（１５４２）勝岡城は北郷氏の所有となった。

又慶長４年（１５９９）の庄内の乱の時

は伊集院方の十二砦の一つとなった。

⑱ 勝岡地頭館跡

館跡は勝岡城跡の下にある。元和年中（１６１５～１６２４）に一国一城令により勝岡城が廃城となり藩主島津氏が地頭をこの地に置いて樺山、餅原、蓼池の三ケ村を管領させた所である。

城下の南北に広大な直線道路約１２０mが通され地頭館も仮屋もこれに沿って建てられたが明治３年戸長役場となった。

⑲ 麓屋敷町に残る水路 写

勝岡城の麓屋敷町を南北に約３００m、昔ながらの砂利道が残っている。この道に沿ってこれ又昔の儘であろう玉石垣で作られた水路が通っている。

この水路に架かる小さな石橋が屋敷と往還を繋ぐ。下を流れる水は当時の生活に欠かせないものであったろう。

⑳ 勝岡の調練場跡

勝岡城跡北西約５００m新坂の西の台地にあり、村人は「調練場」と呼んでいる。調練は毎月２・５・８の日に行われ、道路脇には茶店が並び、各々決められた飲食物を売っていたと云う。現在この地は茶畑と町の体育施設になっている。

㉑ 今市橋

勝岡から今市、郡元を経て都城に至るには、沖水川に架かる今市橋を渡らねばならない。当時は板橋で今の今市橋上流１００m都北衛生センターの下流に架せられていたようである。

日向地誌には「本村（蓼池）より郡元村に至る間道に属す。長２０間、幅２尺、夏月は出を徹し徒渉なり、冬月に至り則ち出を架す」とあり、又古老の話によると渡し船があってこれを利用していたようである。

都　城　市

㉒ 早水神社

今市橋を渡ると今市でここから西南に約１km、国鉄日豊線の北側に早水神社がある。祭神は応神天皇、牛諸井、髪長媛の三神で、大雀命（仁徳天皇）に見染められて妃となった髪長媛の出生地とも伝えられている。又池のほとりにある沖水古墳はこの媛にまつわるものと云われている。

㉓ 祝吉御所跡

早水神社から東へ２００mの所に祝吉御所跡がある。建久７年（１１９６）惟宗忠久が薩摩からこの地に入って居館を祝吉に定め、島津庄を治めた。

惟宗氏はこの島津の地名に因んで島津と名乗り島津忠久と称した。なお島津家発祥地記念碑が御所跡に建立されている。

田　野　町＜宮崎郡＞

㉔ 伊東塔

田野より北の方向、穆佐を経て高岡に至る道は、鹿児島街道と高岡往還を南北に結ぶ間道である。学ノ木より屋敷を抜けて陣五元橋を渡ると三角寺で入口に、小高い丘があり伊東家の供養塔と言われる宝塔が立っている。

高さ２m、軸部正面に陀経阿弥陀仏とあり、天正４年（１５７６）３月２６日の建立である。なお三角寺の地名は借屋原城主の菩提寺であった三角寺から来ている。

㉕ 借屋原城跡

三角寺集落の西北仮屋原にあって、音松川と松山川に挟まれた山嶺にある。日向地誌によると「南は断崖百尺、音松川その麓を繞る。北は松山川を帯ぶ云々険阻の地勢

ない」又「永祿１１年伊東氏４８城の一つで城主長倉河内守並にその子宮内大夫」とある。

今は杉の造林地である。

⑫⑥ 集落の番人さん

三角寺を出松山川に架かる秩ケ瀬橋を渡り、西の尾峯伝いの旧道を北に進むと約３Kmで堀口の集落に入る。

番人さんと呼ばれる延命地蔵菩薩は新道と交差する四つ角に立つ。自然石に菩薩名を彫りこんだものであるが、集落の守番役を頼んだものであろう。

高　岡　町＜東諸県郡＞

⑫⑦ 内の八重の馬頭観音

堀口の集落を下り川を渡ると高岡町内の八重である。内の八重川に架かる太鼓橋の南が田野、北が高岡であるが、橋の北西に狭野神社があり、馬頭観音が祀られている。道の嶮しさに泣いた当時、牛馬への感謝は殊に深く、近隣からの参詣も後も絶たなかったと云う。

ここは藩政の頃島津藩領南端の地で見張所がおかれていた。

⑫⑧ 百石橋 ㊨

柞の木橋の近く旧道の深い谷川に土橋が残っている。藩政の頃島津藩の武士が田野径由で鹿児島へ参上の途次、馬上より橋を架けることを命じたので住民達が丸木を渡して造ったと云う。なおその武士が百石取りであったことから橋名を百石橋、又渡した丸木が「ゆすの木」であったので、このあたり一帯を柞の木橋と呼ぶようになった。

⑫⑨ 柞の木橋の番所跡

内の八重から約1.７Kmで柞の木橋に至る。ここより南東へ約５００m、椎屋形に通ずる所に窪地がある。山の尾根が四方から集まつており、交通のかなめとなっているので番所が置かれた。太田家が代々番士役を勤め、通行手形の監察に当った。

今は畑となっているが、杉の巨木が数本そびえる。

⑬⑩ 山田溜池

旧道と新道の交差点から東に下った所に広大な溜池がある。

石碑の碑文によると寛文元年（１６６１）に築造され、１００町歩を潤おして来。その後宇都溜池が出来、下倉永に揚水機が出来たので現在は６０町歩がこの地を利用している。

日向地誌によると「面積五町餘、隄高一寸八尺、敷１６間、馬蹈3間、深三仞餘」とある。

⑬⑪ 算術塚

山田溜池からは平坦な道である。６００m程行くと上倉永の公民館に着く。公民館横の一段高い所は算術塚と呼ばれるが、田の神と石碑が仲良く並んでいる。

石碑は高さ１mで側面に豊後国竹田産、明治２４年２月１５日とある。氏名は読みとれぬが、嘉永から安政年間に子弟に算学を授けた人と云われる。

⑬⑫ 穆佐城跡

上倉永公民館より１.５Kmで麓に至る。城跡は穆佐小学校に接してある。穆佐城は六笠城とも呼ばれ、日向三高城の一つである。元弘年間（１３３１～１３３４）足利尊氏がここを占領し、後畠山、今河氏が目州探題として居城した。応永の頃（１４００）は島津久豊が城主となり、後伊東氏が４８城の一とした。伊東氏敗走後は永く島津氏の領とするところとなった。

⑬③ 弥五郎どんの足跡

百石橋から７００ｍの処で新道と交差する。旧道を１００ｍ進むと場床地区に至る新道で寸断される。

それより手前に弥五郎どんの足跡だと云う凹地があるが、もう一方の足跡は大淀川を跨いだ花見にあると云われる。

⑬④ 穆佐の御誕生杉（町指定天然記念物）

穆佐城跡の西隅に在る。城主島津豊久の子忠国が応永１０年（１４０３）にこの城で生れた時、年くらべにと杉２本が植えられたのが御誕生杉で「御年くらべの杉」とも云われている。

この杉は明治７年に焼失したが、すぐ植えつがれ２代目が樹令９０年になっている。

⑬⑤ 穆佐番所跡

穆佐城跡の東下に穆佐小学校がある。

校庭の北角はプールであるが、ここが番所跡と云われている。

日向地誌によれば「穆佐城墟の東北麓にあり藩治の時、鹿児島藩主、島津の建設する所なり、然れども譏察は厳ならず往来の行旅　誰何する所なし」とある。

⑬⑥ 番所橋

関所跡のすぐ北側を瓜田川が東流している。この川に番所橋（永久橋）が架かるが、昔は板橋で場所もここらあたりであろうと云われている。

日向地誌に「隣村往還に属す、瓜田溝に架す、長八間」とある。

⑬⑦ 島津久豊の墓

番所橋より約1.2Km行くと小山田の集落に入り、道路西側の丘陵地に島津久豊の墓がある。

久豊は応永１０年（１４０３）穆佐城に入り、池尻城、細記城などを築き、伊藤祐安の女を妻にむかえ、８年後の応永１８年鹿児島に帰り再び日向入りして応永３２年（１４２５）に穆佐城にて没している。

この墓所は安政４年（１８５７）頃、島津氏によって設けられた。

⑬⑧ 月知梅（国指定天然記念物）

小山田の集落から約1.5Kmで高浜の集落に入る。当地の月知梅は香積寺の庭に植えてあった梅樹で香積の梅といった。安永天明の頃（１７７０～１７８０）までは１株であったが、天保の頃（１８２０～1840）には７株となり、枝より根を生じて蔓延している。花は白色で八重、月知梅の名は島津光久が延元元年（１６７３）に命名した。

⑬⑨ 穆佐神社

麓の番所橋より左に折れ西に迂回すると道は小山田の集落から山伝いとなる。山の登り口に穆佐神社がある。宇佐八幡宮とも呼ばれ、祭神は応神、仲哀の国天皇及び神功皇后とされている。

⑭⓪ 処刑場跡

穆佐神社から共同墓地を通って約６００ｍ行くと台地がひらけ、みかん園が広がっている。みかん園の入口左の奥まった処に２坪ほどの墓地がある。

ここは「ハタオンバ」と言われ、罪人の処刑場であったらしく、ここを通ると祟りがあると恐れられていた。

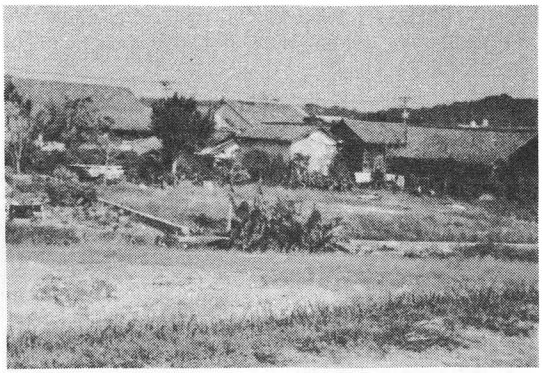
墓石は１０基程で明暦元年（１６５５）から享保年間のものである。

⑭① 大丸渡し

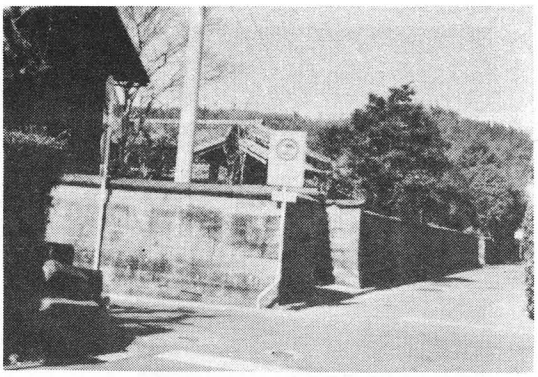
月知梅の北側を通る新道と穆佐神社からミカン園の台地を抜ける旧道が大淀河畔で合流する。竣工なった大の丸橋を渡ると高岡の市街地に入る。渡し場はこの橋より１００ｍ上流にあって高岡往還に接続して

いた。

日向地誌によれば「隣村往還に属す、本村より五町村に至る楠見渡しの下流２０町許にあり、幅１町２０間、平水深５尺渡船一艘あり」とある。

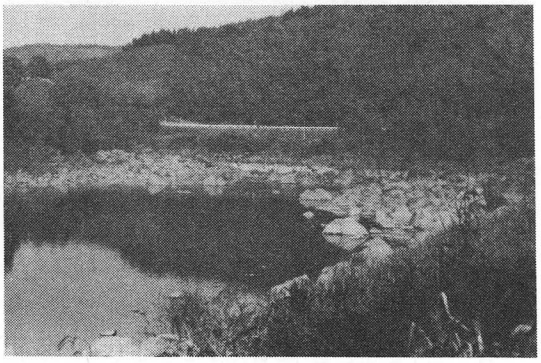


⑩　角太屋
裏庭に大きな倉庫が並び繁昌したという。

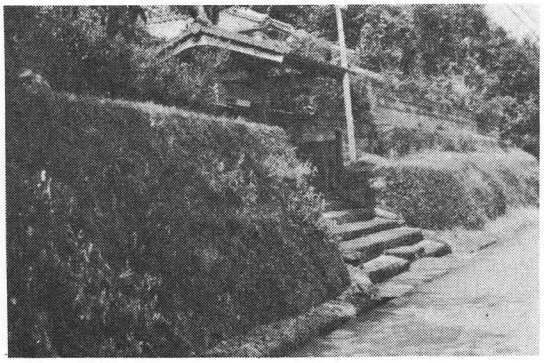


⑫　武家屋敷通り
武家屋敷通りの面影を残している区画である。

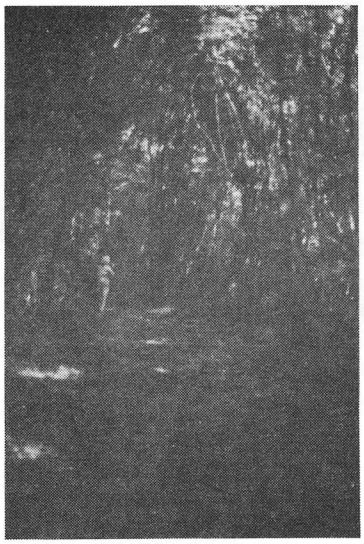
⑮　内山川の石橋
今も健在で使用されているが、痛みがはげしい。



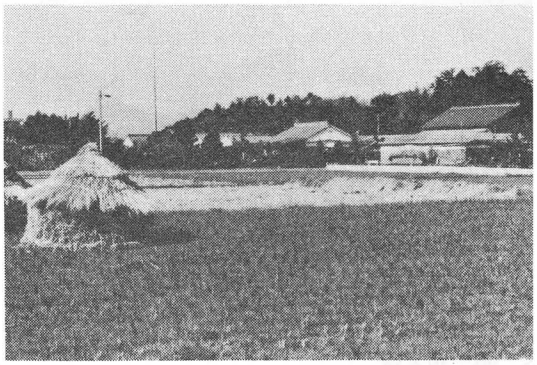
⑱　去川の渡し
去川関所跡よりわずか上流が渡し場の跡といわれている。



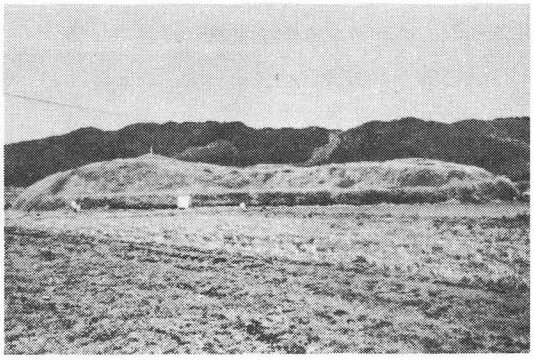
⑳　去川の二見家
関所御定番として明治初めまで１２代にわたり関守を勤めた二見家



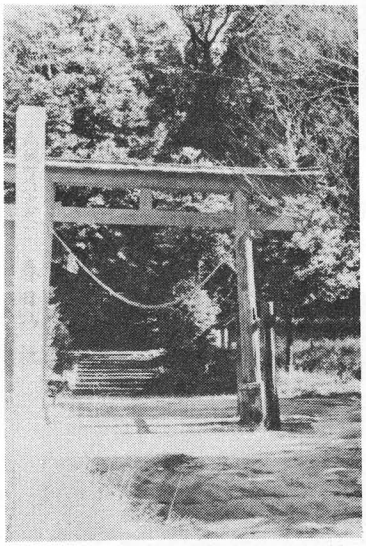
㉔　薩摩越と赤坂
　営林署有水事業所の後側にある山が薩摩峠である。



㉟　高城城跡
　名月山日和城とも言い、八城からなっていた。



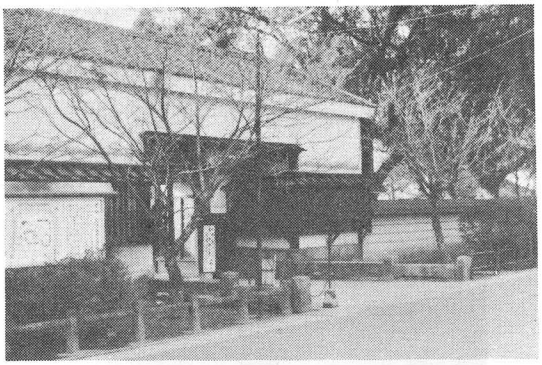
㊱　高城町古墳群
　高城城跡の背部の牧ノ原台地に県指定史跡の古墳がある。



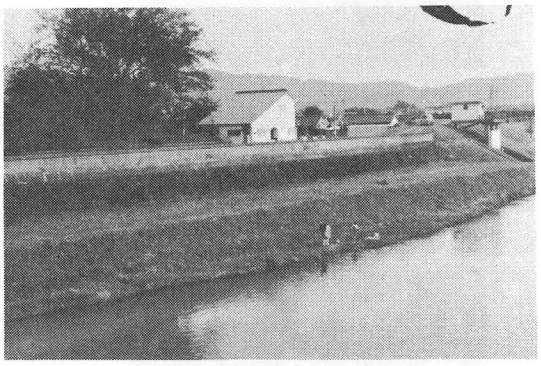
㊲　春日神社
　荘園時代には神社例祭には市が立ったと伝えられている。

㊷　高木街道松並木
　昭和１０年代まで残っていた松並木。これはその当時の写真である。

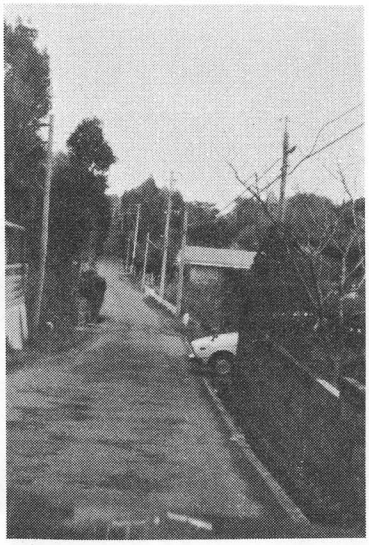
⑤⓪　蔵原通り
　昔領主蔵があったところからそう呼ぶようになった。



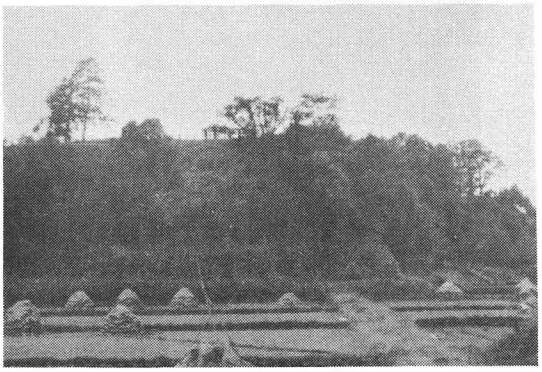
⑤②　米蔵屋敷跡
　元禄１２年に設けられた米倉といわれ、戦後まで門前には堀が残っていた。



⑤⑨　通船方跡
　船頭小屋、舟大工小屋、積込場、倉庫等もこの辺りに並んでいたといわれている。



⑥⑨　元服坂
　昔、領主の子息が鹿児島で元服式を挙げる旅立ちを家来たちがここで見送ったという。

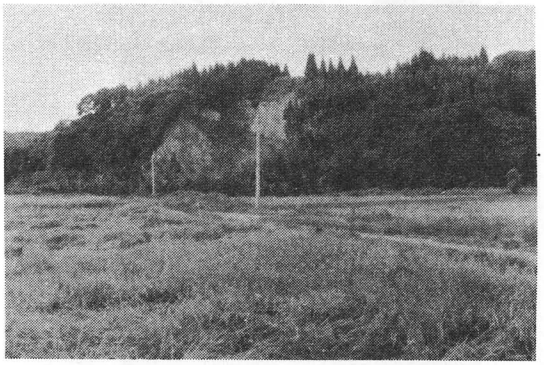


⑥③　都城城跡
　市街地の西にあり、天授元年（１３７５）に築城されたといわれている。

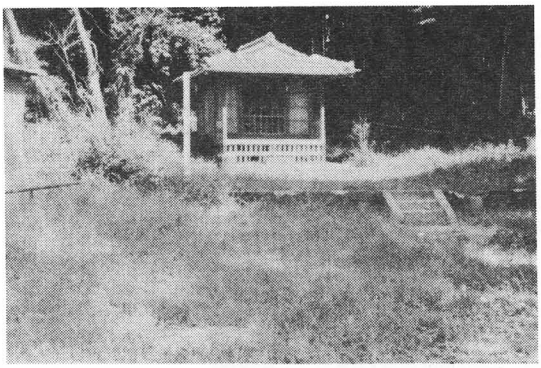
⑧⓪　里程標
　沓掛の集落を通る旧国道筋にあるが、損傷がひどい。

⑧①　田野・清武村界標
　裏面に明治４０年９月建設と刻まれている。

⑧⑦　唐仁田の道標
　明治３４年１０月の建立である。

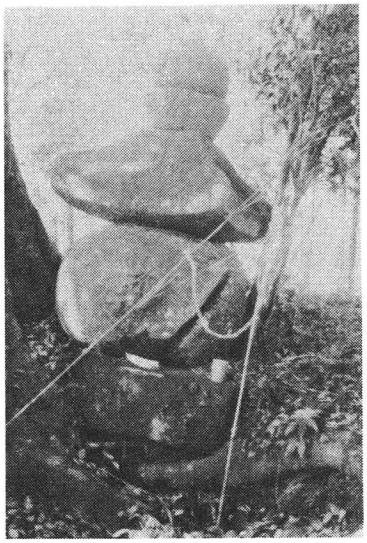


⑨⑥　山之口城跡
　走湯神社の北方の丘陵地にあり、亀鶴三石城とも呼ばれた。

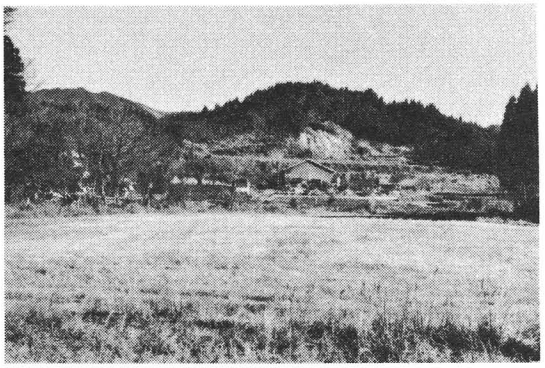


⑮ 桜木の将軍神社
勝軍地蔵を祀ったから、将軍神社と呼ばれるようになった。

⑯ 王子どんの焼石神
太古に霧島山が噴火した時の焼石を御神体として祀ったといわれる。



⑰ 腹切りどんと兼重神社
刀の切り跡のような裂け口が残っている。



⑱ 松尾城跡
山之口役場から南へ1㎞富吉に至る三股往還筋にあった。

⑪⑨ 麓屋敷町に残る水路
南北に約３００ｍ、昔ながらの砂利道が残り、この道に沿って水路が通っている。

⑫⑧ 百石橋
柞の木橋の近く、旧道の深い谷川に土橋が残っている。

ま と め

本県では、昭和５２年度に国の補助を受け、豊後・高千穂・椎葉等５街道、昭和５３年度に、米良・飫肥・鵜戸・志布志の４街道、そして、昭和５４年度には、肥後・薩摩の２街道に諸塚間道の調査を実施した。これで一応県内の主要街道の調査は終了したわけである。

歴史の道調査は、九州では本県が最初である。当時、芭蕉が辿った奥の細道や熊野権現参詣道、それに中仙道のような著名街道の調査はなされていた。

しかし、県内の主要街道の全てを調査し、街道の歴史的背景、街道の果した役割、それに街道沿いの交通関係史跡等を明らかにする調査はなく、このような調査に取り組んだのは本県が初めてであった。

調査初年度は、国が伝統的建造物群選定に先だって調査を実施したように、歴史の道の指定、又は選定に先だっての事前調査というふうに受け取っていたが、文化庁の考えは、このような局所的な考えではなく、全国を全て調査し、南は鹿児島から北は北海道まで、全国自然遊歩道のように、全国歴史の道を設定するための基礎調査であり、非常にスケールの大きい調査であった。

このように、全国を一巡するような歴史の道が整備されるのはまだまだ先のことであろうが、調査を実施してきた本県にあっては、この調査を幾に街道沿いの史跡に標柱や説明板をたてたり、歴史の道歩こう会が催されたり、各市町村において街道保存、又は活用に取り組みをみせるようになったことは、大変喜ばしいことである。

県としても、今後、貴重な文化財として歴史の道の保存、整備等に努めていかねばならないと考える。

主要街道の調査は一応なされたわけであるが、間道や支道の調査が残されている。したがって、これらの調査は、今後も国の補助を受けて継続するか。県独自で調査を続けていくかする必要があろう。

調査の組織

1. 調査主体　　宮崎県教育委員会
2. 事務局　　宮崎県教育委員会

教育長	四本　茂
教育次長	国府　重則
〃	坂口　鉄夫
文化課長	日高　三好
課長補佐	串間　実
庶務係長	田中　君彦
主任主事	王原　敦美
文化財係長	山下　正明
主任主事	立元　久夫
〃	小森　達郎（事業担当）
〃	今村　正人
〃	岩永　哲夫

3. 報告書監修

石川恒太郎（県文化財保護審議会委員）

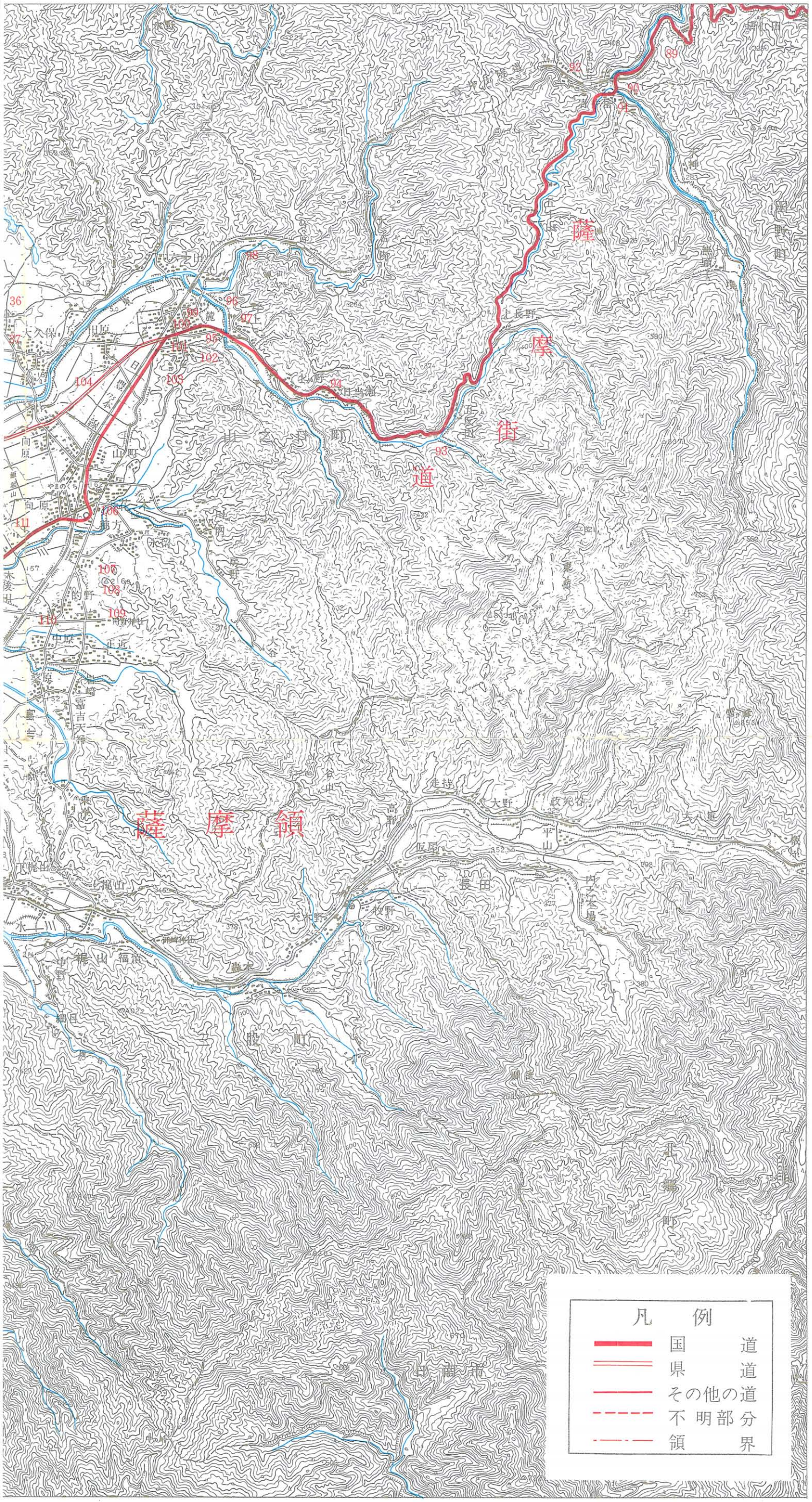
4. 調査員

街道名	氏名	役職
薩摩街道	久枝　敏	県文化財保護指導委員
	阿万敬一	清武町文化財保存調査員
	児玉三郎	県文化財保護指導委員
	田上未雄	庄内小学校教諭
肥後街道	真方良穂	県文化財保護指導委員
	井上政造	〃
	園田　隆	加久藤小学校尾八重野分校教諭
	加藤宣夫	飯野小学校高野分校教諭
諸塚間道	甲斐重光	諸塚村職員
	深水　洋	諸塚中学校教諭

宮崎県「歴史の道」調査報告書
昭和５５年３月３１日
編　集　　宮崎県教育庁文化課
発　行　　宮崎県教育委員会
宮崎市橘通東１丁目９番１０号

印刷所　　酒匂軽印刷

宮崎県歴史の道



薩摩街道

28 石山越古戦場跡	89 竹井茶屋
29 石山寒天製造所跡	90 改修記念碑
30 諏訪馬場および諏訪神社	91 天神川板橋
31 高城野町跡	92 妙寺ケ谷番所
32 桜馬場下町口跡	93 日当瀬の太子様祠
33 不動寺馬場と六地蔵幢	94 五反田番所跡
34 高城地頭仮屋跡	95 地頭仮屋と地頭馬場跡
35 高城城跡	96 山之口城跡
36 高城町古墳群	97 走湯神社
37 春日神社	98 一の渡関所跡
38 七日市の石敢当	99 亀甲の岩敢当
39 小山川原古戦場跡	100 山之口駅標柱
40 霧島池	101 麓の文弥節人形浄瑠璃
41 花ノ木川（境川）	102 隠番所跡
42 高木街道松並木	103 保食神社
43 高木原御茶屋跡	104 霧島街道（佐土原大道）
44 平江町	105 桜木の将軍神社
45 前田橋	106 王子どんの焼石神
46 唐人町跡	107 腹切りどんと兼重神社
47 本町跡	108 松尾城跡
48 油澄所と焼物所跡	109 的野八幡宮
49 宮丸蔵人道屋敷跡	110 男塚女塚と新町跡
50 蔵原通り	111 向原の馬頭観世音
51 北口馬場	112 隠れ念仏洞
52 米蔵屋敷跡	113 道しるべ
53 上原元師誕生地	114 経典読誦記念碑
54 領主館跡	115 島津稲荷
55 都城市立郷土館	116 神柱神社
56 西口番所跡	117 勝岡城跡
57 竹之下川橋	118 勝岡地頭館跡
58 三重町・後町	119 麓屋敷町に残る水跡
59 通船方跡	120 勝岡の調練場跡
60 兼喜神社	121 今市橋
61 二厳寺跡	122 早水神社
62 何欽吉の墓	123 祝吉御所跡
63 都城城跡	
64 龍峰寺跡	
65 天長寺跡	
66 狭野神社	
67 都島旧跡	
68 本ノ原	
69 元服坂	
70 一里塚跡	
71 元服御茶屋跡	
72 平長谷	
73 今町一里塚	

凡例

- 国道
- 県道
- その他の道
- 不明部分
- 領界

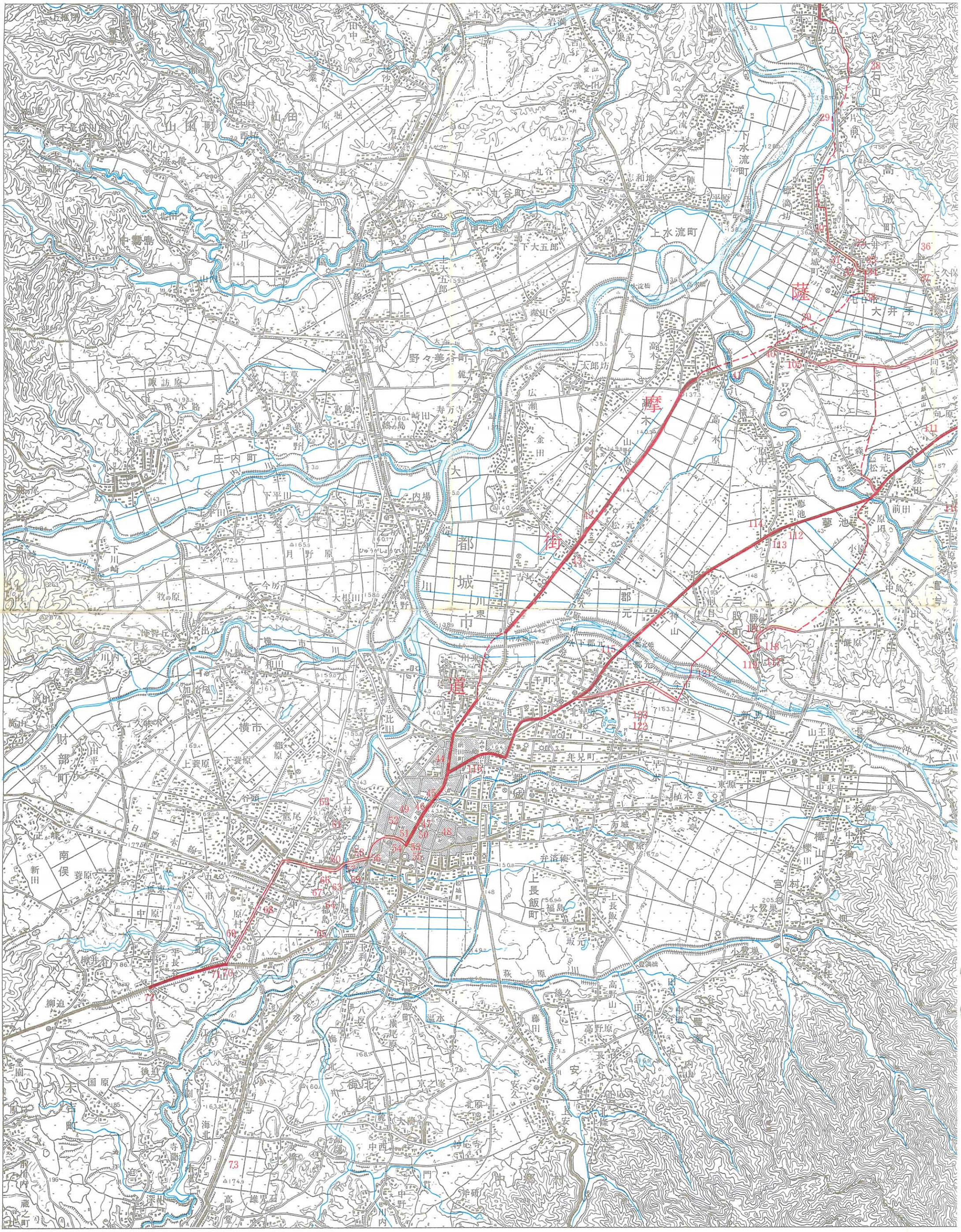
記号

- 幅員11.0m以上の道路
- 幅員5.5m～11.0mの道路
- 幅員2.5m～5.5mの道路
- 幅員1.5m～2.5mの道路
- 幅員1.5m未満の道路
- 国道および路線番号
- 自動車通行困難の部
- 建設中の道路
- 有料道路および料金徴収所
- 国有鉄道
- 民営鉄道
- 地下鉄および地下式鉄道
- 森林鉄道等
- 路面の鉄道
- 索道
- 国有鉄道 / 民営鉄道（建設中または運行休止中）
- 橋および高架部
- 切取部
- 盛土部
- 送電線
- 市役所（東京都の区役所）
- 町・村役場（指定都市の区役所）
- 官公署（特定の記号のないもの）
- 裁判所
- 税務署
- 営林署
- 測候所
- 警察署
- 駐在所・派出所
- 消防署
- 保健所
- 郵便局
- 電報・電話局
- 自衛隊
- 工場
- 発電所・変電所
- 小・中学校
- 高等学校
- 大学・高専
- 病院
- 神社
- 寺院
- 高塔
- 記念碑
- 煙突
- 電波塔
- 油井・ガス井
- 灯台
- 坑口・洞口
- 城跡
- 史跡・名勝・天然記念物
- 噴火口・噴気口
- 温泉・鉱泉
- 採鉱地
- 採石地
- 重要港
- 地方港
- 漁港

作製　宮崎市橋通西5丁目6-39　☎(0985)27-4068 (株)富士マイクロサービスセンター

5000m

昭和五十五年三月



「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の５万分の１地形図を、
複製したものである。（承認番号）昭55 九複第 85 号」

文化課

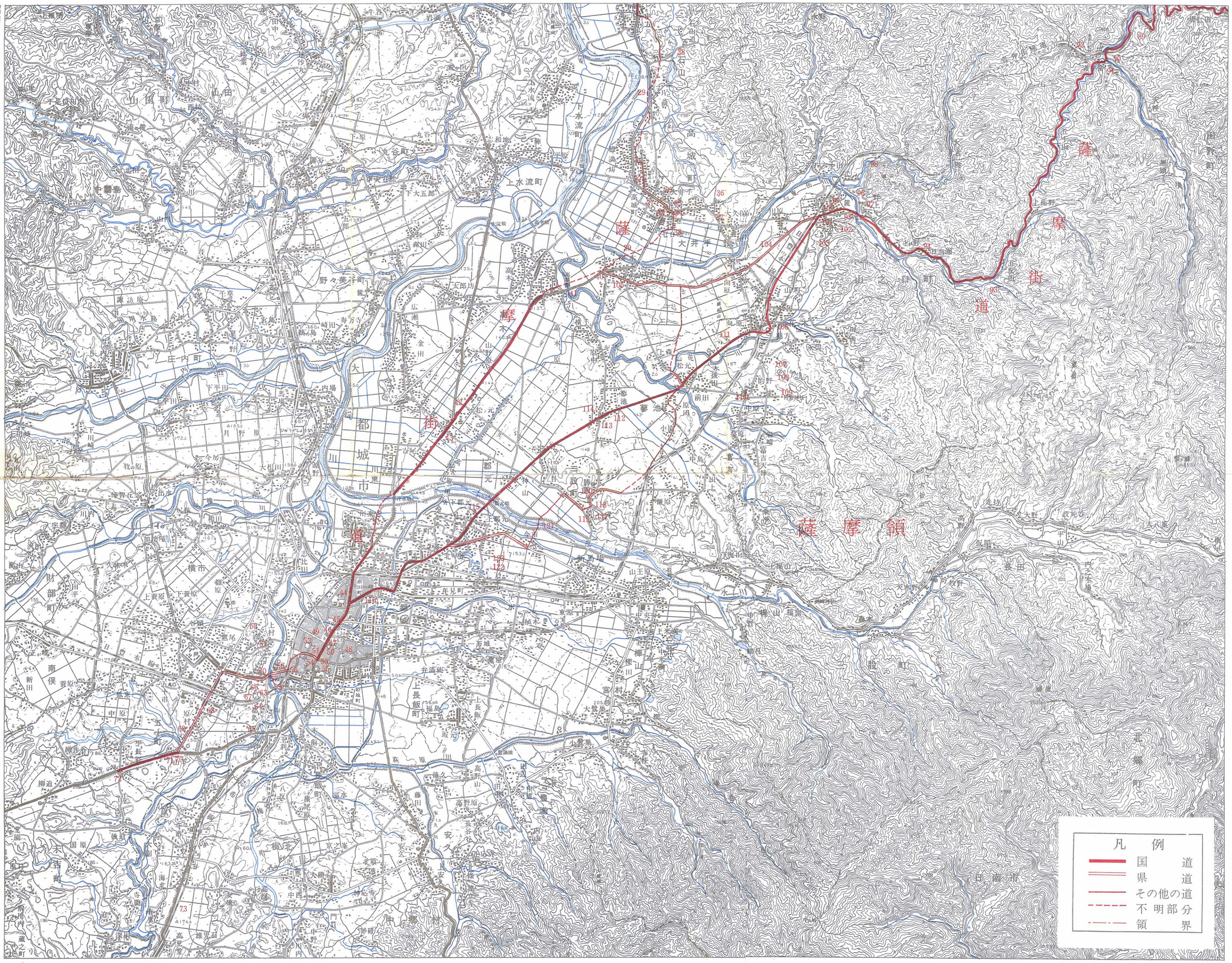
都城

昭和五十五年三月

文化課

都　城

昭和五十五年三月



宮崎県歴史の道

薩摩街道	
28 石山越古戦場跡	89 竹井茶屋
29 石山寒天製造所跡	90 改〆記念碑
30 諏訪馬場および諏訪神社	91 天神川板橋
31 高城野町跡	92 妙寺ケ谷番所
32 桜馬場下町口跡	93 日当瀬の太子様祠
33 不動寺馬場と六地蔵幢	94 五反田番所跡
34 高城地頭仮屋跡	95 地頭仮屋と地頭馬場跡
35 高城城跡	96 山之口城跡
36 高城町古墳群	97 走湯神社
37 春日神社	98 一の渡関所跡
38 七日市の石敢当	99 亀甲の岩敢当
39 小山川原古戦場跡	100 山之口駅標柱
40 霧島池	101 麓の文弥節人形浄瑠璃
41 花ノ木川（境川）	102 隠番所跡
42 高木街道松並木	103 保食神社
43 高木原御茶屋跡	104 霧島街道（佐土原大道）
44 平江町	105 桜木の将軍神社
45 前田橋	106 王子どんの焼石神
46 唐人町跡	107 腹切りどんと兼重神社
47 本町跡	108 松尾城跡
48 油澄所と焼物所跡	109 的野八幡宮
49 宮丸蔵人道屋敷跡	110 男塚女塚と新町跡
50 蔵原通り	111 向原の馬頭観世音
51 北口馬場	112 隠れ念仏洞
52 米蔵屋敷跡	113 道しるべ
53 上原元師誕生地	114 経典読誦記念碑
54 領主館跡	115 島津稲荷
55 都城市立郷土館	116 神柱神社
56 西口番所跡	117 勝岡城跡
57 竹之下川橋	118 勝岡地頭館跡
58 三重町・後町	119 麓屋敷町に残る水跡
59 通船方跡	120 勝岡の調練場跡
60 兼喜神社	121 今市橋
61 二厳寺跡	122 早水神社
62 何欽吉の墓	123 祝吉御所跡
63 都城城跡	
64 龍峰寺跡	
65 天長寺跡	
66 狭野神社	
67 都島旧跡	
68 本ノ原	
69 元服坂	
70 一里塚跡	
71 元服御茶屋跡	
72 平長谷	
73 今町一里塚	

凡例

国道
県道
その他の道
不明部分
領界

記号

国道および路線番号
自動車通行困難の計
建設中の道路
有料道路および料金徴収所
国有鉄道（単線・複線以上）
民営鉄道（側線・地下駅・トンネル）
地下鉄および地下式鉄道
森林鉄道等
路面の鉄道
索道
国有鉄道 / 民営鉄道（建設中または運行休止中）
橋および高架部
切取部
盛土部
送電線
市役所（東京都の区役所）
町・村役場（指定都市の区役所）
官公署（特定の記号のないもの）
裁判所
税務署
営林署
測候所
警察署
駐在所・派出所
消防署
保健所
郵便局
電報・電話局
自衛隊
工場
発電所・変電所
小・中学校
高等学校
大学・高専
病院
神社
寺院
高塔
記念碑
煙突
電波塔
井油井・ガス井
灯台
坑口・洞口
城跡
（史跡・名勝・天然記念物）
噴火口・噴気口
温泉・鉱泉
採鉱地
採石地
重要港
地方港
漁港

1：50,000

0　1000　2000　3000　4000　5000m

「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て同院発行の５万分の１地形図を、複製したものである。（承認番号）昭55 九複第 85 号」

作製　宮崎市橘通西5丁目6-31　☎(0985)27-4066 (株)富士マイクロサービスセンター

文化課